

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# でぽら DePOLA 23

2002年  
秋冬号

特集

## 先生は大地や川、地域の人々 子供たちの農山漁村体験



# 先生は大地や川、地域の人々 子供たちの農山漁村体験

特集企画に寄せて

## 公

立学校の週5日制が平成14年4月より実施され、「ゆとり」の中で一人ひとりの子供たちに「生きる力」を育成することを基本にした新学習指導要領が導入されました。

- 同要領では、小学3年生以上のすべての学年に、体験学習を重視した「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)を設けているのが特色です。この新学習指導要領の概要は、
- (1) 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。
  - (2) 自ら学び、自ら考える力を育成すること。
  - (3) ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。
  - (4) 各学校が創意工夫を生かして特色ある教育、特色ある学校づくりを進めると。

教科の枠にこだわらず、豊かな人間性・社会性を育み、体験的な活動を重視し、児童生徒が自ら考えたり調べたりする力を育成する「総合学習」が、新学習指導要領の目玉といえます。

## 新

しい時代を拓く心を育てるために「新」について中央教育審議会は「生きる力」の核となる豊かな人間性とは、美しいものや自然に感動する心の柔らかな感性、正義感や公正さを重んじる心、生命を大切に、人権を尊重する心などの倫理観、他人を思いやる心や社会貢献の精神、自立心、自己抑制力、責任感、他人との共生や異質な

ものへの寛容などへの感性や心であると述べています。(平成10年6月)。

これは学校、家庭、地域が連携して社会全体であらゆる場で取り組んでいくべきものであり、それを具現化する一つの方法が「総合学習」なのです。

しかし教育現場の中には、この総合学習に合わせた対応がなされているとは言えず、模索中の学校が多いのが実情のようです。

一方、総合学習を取り入れた多くの学校が大きな教育効果を収めており、子供たちが自



山で枝打ち作業を体験する(飯山市・森の家)

ら学ぶ傾向が高まり、基礎学力が向上してきたと報告しています。

「体験学習」は、実際に学習のフィールドに出て、見たり聞いたり、ふれたりして確かめる学習です。従来の与えられて覚えることを中心にした授業では、興味が持てないとか記憶するのが苦手などの理由で、落ちこぼれになる子供がいましたが、体験学習では自ら学んで考えるという力が身につけていき、それが生きた知識として教科の学習に帰納する

と教育関係者の多くが語っています。

## 総

総合学習の最高のフィールドは、過疎市町村などの農山漁村の豊かな自然です。自然のなかで様々な動植物に接し、生命の営みの基本となる農業などを体験することで、子供たちは実に多くのことを学びます。とくに都市に住む子供たちは、毎日食べているご飯や野菜、肉、水等を作って供給している人々の苦勞や知恵、自然の生態系や循環型社会の仕組みを肌で学び、都市が農山漁村のよって支えられていることを実感します。農家の人や昆虫・家畜などにふれると、自分以外のものに対する優しさや思いやりの心を持つようになります。

子供たちが本来持っている、いつも生き生きして新鮮で、驚きと感動に溢れた世界を、大人の常識やエゴ等で潰すことなく、感性の豊かな時期に精一杯体験学習させること。これは、農作業の手伝いをせず川や森に入らなくなった田舎の子供たちにも求められており、自分たちの地域や自然を知り、誇りと愛着を持つ機会として学校と地域が積極的に取り組みはじめています。

本誌では、体験学習に長年取り組んできた武蔵野市の事例を中心にいくつかの具体例を紹介します。これらは今までも「交流事業」として取材紹介してきましたが、今回は子供たちの総合学習としての側面から取り上げました。子供たちと元気な田舎の人々に沢山のことを学ぶ機会となりました。

「てぼら」編集部

(財) 過疎地域問題調査会

## 先生は大地や川、地域の人々 [ 子供たちの農山漁村体験 ] 特集企画に寄せて 2



武蔵野市セカンドスクール。そば打ち、山での間伐作業、もちつき体験（飯山市）



### 都会の子供たちの新鮮田舎体験 武蔵野市セカンドスクールIN 飯山 「お父さんお母さん」と暮らした8日間

第四小5年生 / 飯山市戸狩民宿(北条地区) 4

### 田んぼで森で、子供たちは労働の辛さも楽しさも味わう

第三小5年生 / 飯山市信濃平民宿の9日間 8

21世紀の最大のテーマは都市と農山漁村との交流(土屋正忠・武蔵野市市長) 12



須玉小5年生の田植え体験学習

### ふるさとの自然や暮らしを学ぶ

### 米づくりを通してふるさと学習

体験施設「大正館」を拠点に(山梨県須玉町)

### 白神山地はなぜ世界自然遺産になったの?

ブナ林で体験学習 / 秋田県藤里町小学生の取り組み 16

### 北の大地と人が織りなす総合的学習

「ピンネの広場」で探検・発見・発信 敏音知小学校(北海道中頓別町) 20

「でぼら」とは

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。わが国の過疎市町村の数は1296(過疎地域市町村1210と過疎地域市町村に準ずる特定市町村86の合計)、全市町村の40%にも達しています。過疎市町村は豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、交流をすすめるために、過疎地域と都市地域を結ぶホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として、“DePOLA でぼら”をお届けします。回覧し、多くの方にご覧いただければ幸いです。

写真 表1

上左 / 飯山市戸狩民宿で武蔵野市セカンドスクールの児童たち  
右 / 白神山地・岳岱でブナ林を自然観察する藤里町小学生たち  
中 / 田植えをする山梨県須玉町小学生

13 下左 / 松崎町岩地漁港に体験修学旅行に来た名古屋市中立中学生たち  
右 / 大島村「庄屋の家」であけび蔓細工をするいには野小学生たち

親子で田植え(矢部町菅地区)



### でぼら・エッセイ 夏休み1カ月田舎体験

NPO法人 国際自然大学校 代表 佐藤初雄 22

### 親子で山村交流

### 田舎の原風景を舞台に感動と発見を

越後で田舎体験(東頸城地区) 24

### 濃密な「山里のやすらぎ」交流

矢部町菅地区オーナー田(熊本県) 28

### 小さな入江で始まった海のグリーン

ツーリズム 松崎町岩地漁港「体験修学旅行」  
(静岡県西伊豆) 31

## INFORMATION 体験学習受入れ地区 施設&主なプログラム 34

全国過疎問題シンポジウム「2002 in やまがた」他 35

編集後記/奥付 35

# 都会の子供たちの新鮮田舎体験 武蔵野市セカンドスクールIN飯山



▲課題別学習で、昆虫採集に出かけた男子たち。



▲溜池でのヘラブナ釣り。池にはヘビも泳いでいる。



▲民宿ベルフォールではお父さんの指導でそば打ち体験学習。



▲夕食後は今日の活動を記録。女主人大口繁美さんがほっとする時間だ。  
◀飯山市戸狩・北条地区

## 「お父さんお母さん」と暮らした8日間 第四小5年生／飯山市戸狩民宿（北条地区）

都会の子供たちに農山漁村の暮らしを体験してもらおうと、東京都武蔵野市が1992年から実施している自然の学校「セカンドスクール」が、今年も長野県飯山市他9市町村で始まった。

田植えの時期を迎え、山も田も緑一色に染め上げられた田園の中で、テレビゲームもコンピ二もない子供たちの8～9日間が始まった。

「稲の花つて、どんな花？」

その日、長野県北信濃の空は小気味よいほどに晴れわたっていた。田植えを終えた稲田は6月の空を映して光っている。東京都武蔵野市立第四小学校5年生の児童78人がやってきたのは、そんな田んぼが山あいの斜面にくつも並ぶ飯山市戸狩温泉北条地区。冬場に

は一面グリーンテとなるスキ一のメツカだ。

北条地区の6軒の宿に分宿した子供たちは、到着して二日目のこの日、午前中に田植えを体験し、午後からはそれぞれが興味のあるテーマで学ぶ課題別学習に取り組んでいた。

宿のひとつ民宿かのえの庭先では、ノートを広げた子供たちが宿のご主人に米づくりについての質問をしている。ご主人は雪国ならではの苦勞を話す。

「こつこつ山の上では、田んぼに水を引いてくるのは大変なのでね、雪解け水を使わなけ



ればならないんです。だけど冷たい水で稲を育てるのは難しいので、溜め池で温めて、その水を田んぼに引いて使うんだね」

聞いていた子供の一人が「うん、田んぼに入った時、そんなに冷たくなかった」

と、即座に反応する。

午前中に田植えを体験した子供たちにとつて、田んぼの中のヌルヌルした泥まみれの感触や水の温度は、強烈な印象とともにすでに身近なものとなっていた。宿のこ主人の話が実感として理解できるのだろう。質問は次から次へと生まれていく。

「お米が取れるまでには、何日かかるの？」

「稲の花つて、どんな花が咲くんですか？」

宿のこ主人は子供たちの質問に誠実に楽しそうに答えていく。お米の話の途中から、今度は男子児童から雪国の暮らしについての質問が出てきた。

「雪ほどの位積もるんですか？」

雪の質問にはお母さんが代わって答える。ちなみにこの8日間、子供たちは宿のこ主人夫妻を「お父さん、お母さん」と呼ぶ。

「毎年4月に雪が消えるまで、この屋根から雪が落ちると、3m位になるの。この辺の家は茅ぶき屋根の上にトタンをかけて、雪がすべりやすくしてあるんですよ。みんな、気付いたかな？」

窓についた金具は窓枠に木材をかけるため、雪の重みから窓ガラスが割れるのを防ぐのだという。通常よりずっと高い位置に取り付けられた消火栓ひとつを見ても、この土地の雪の深さを思わないわけにはいかない。雪が降れば雪ダルマという、のんきな都会の暮らしとは何と違うだろう。山と田んぼの緑の中に点在する家々を眺め渡しながら、子供たちの目は何かを考え込むかのように動か

ない。

### 土地の人との交流を

セカンドスクールの8日間の活動プログラムは田植え体験、地引き網体験、ブナの森ハイキング、野菜集荷場見学など大きな活動の他に、それぞれの宿ごとに準備した体験活動があり、さらにそれらの間をぬって児童自身が興味あるテーマを追う課題別学習が盛り込まれている。

課題別学習は児童たちが事前に自分の追いたいテーマを見つけ、下調べをしてこのセカンドスクールに臨んでいる。そのテーマは植物や生物、米づくり、雪国の暮らし、飯山の歴史と、さまざまだ。少人数に別れて各人のテーマを追うこの時間には、指導員のお兄さん・お姉さんが活躍する。

学校が依頼した指導員は大学生や社会人の若者で、各宿ごとに一人配置される。子供たちにとってはお兄さんのような、友達のような頼もしい存在だ。教師が必要以上に介在しない、それがこのセカンドスクールの大きな目的のひとつでもあるようだ。

「地域の暮らしや風土を本当に理解するには、やはり土地の方と少しでも多く触れ合うことが何よりだと思います。子供たちが宿のお父さんお母さんとなるだけ深く接することができるよう、私たち教師は必要最小限の関わりに留めるようにしています」

と第四小の赤羽幸子先生は話す。先生たちは本部が設置された民宿かのに逗留し、夜間は殆ど子供たちの民宿には現れない。

田んぼの畔道をスケッチしながら歩いていく指導員と児童の姿が遠くに見える。タニシを拾ったと見せてくれる子供、イモリを田んぼで捕まえたと得意気な子。四つ葉のクローバーを両手いっぱい摘んで押し花にした

子。へびもカエルももうすっかり友達だ。

### おとうさんが、怒った

子供たちの泊まる各民宿では、普段都会ではなかなか体験することのできない、この土地ならではの楽しみを子供たちに用意してくれていた。民宿上種では、竹ひこに和紙を貼るうちわづくりが始まっていた。

「お母さん、ノリがくっついちゃったよ」「どれ見せてもらん」

聞こえてくる会話はもう殆ど親子のようだ。民宿みはらし荘からは威勢のいい掛け声



民宿のお母さんとアスパラ採りに。熱心にメモを取る少女たち。

大きなサクランボの木に梯子をかけてサクランボの収穫（ローゼンハイム大屋の庭先き）



聞こえる。玄関前で餅つきが始まったのだ。杵を持ち上げてフラフラする子に「ホレ、右足ちゃんと前に出して」「ドーンと腰を据えて」と檄がとぶ。飼犬のコロも嬉しそうに落ち着かない。

つきあがった餅はお母さんが手際よく丸めていく。きな粉とあん大根おろしが並べられ、子供たちも見回りに来た先生も満面の笑顔で頬張る。

向かいの民宿ベルフォーレでは、お父さんの指導によるそば打ちが行われていた。シートを敷いた床に練った蕎麦粉を熨していく小さな姿は、さながら五体投地のようだ。

こうして打った蕎麦は今夜の夕食のテーブルに並ぶという。

少し離れた民宿ローゼンハイム大屋では、大きなサクランボの木に梯子をかけて、サクランボの収穫の真っ最中。恐る恐る梯子を登って、初めて自分の手で摘んだサクランボの味は、きつと一生忘れないだろう。

竹馬づくりに汗を流していたのは、民宿かえの子供たちだった。

「材料の竹を拓いたり、ペンチを使って巻いたりなどの力仕事や、道具を使うのが苦手なんです、今のコたちは」

と、かえのお父さん。出来上がった竹馬にいちばん上手に乗ったのは、校長先生だった。

そして小高い台地の溜池では、民宿グリーンレイク滝沢の子供たちがヘラブナ釣りを楽しんでいた。釣り糸を垂れる子の後をシマヘビを追って走る一団がいる。

隣の畑では、「いいねえ、子供の声が聞こえるの」といいながら、お婆さんがせっせとアスパラガスを収穫している。見渡せば新緑を過ぎた深い緑の山々。梢をわたる風の音も聞こえる。こんな時間が子供たちにはあったのだろうか。

帰り支度が始まった頃、「だめだぞお、こんな巻きかたじゃあ」と滝沢のお父さんが、使い終わった釣り竿をちゃんと片づけられない子供たちを叱った。自分たちにきちんと向き合ってくる大人に、子供たちは気持ち良いほど素直だ。時間をかけて何とも丁寧に釣り糸は巻かれた。

### 地元を見直すきっかけに

スキー場で知られる長野県がシーズンオフの対策にと、各地で模索を始めたグリーンツーリズム。その一環としてスタートした自然

の学校「セカンドスクール」は、飯山市各地区の観光協会の考えていたものと武蔵野市で考えていたセカンドスクールが合致したことによる。

オフには夏場の合宿以外、予約も殆どなかった地元の民宿が、観光協会とともに試行錯誤を重ね、受け入れの方針やコンセプト、さまざまな行事のプランづくりなどに積極的に取り組み、学校訪問なども続け、セカンドスクールを定着させてきた。

これまでも首都圏の中学生を5年間受け入れてきたという民宿かえの主人は「当



民宿かえでは竹馬づくり。出来上がった竹馬にも上手に乗れるようになった。

たり前だと思っていたこの自然環境を、都会の子供たちがこんなに喜んでくれる。そのことによって私たちも改めて地元を見直すきっかけができました」と話す。

田んぼの畔道近くで農機具を手入れしていた野口洋一さんは地元の一住人としてこんなことをいう。

「民宿をやっているわけでもない私らにとっても、この体験学習というのは何の利害もないが、この子たちが大人になった時に、田舎に親しみを持ったり、農業への理解も違ってくるだろうと思うと、嬉しいですね」

6班に分かれた子供たちはそれぞれの宿で夜を迎えた。

その夜、民宿ベルフォーレでは食事を終え、当番の子供たちが食器を片づけ、厨房の流しで洗っていた。手際の悪い子供たちを脇で見ながら、女主人の大口繁美さんは手を出したいのをじっと我慢して、子供に任せる。明日、新潟の海辺に出かける子供たちのために、この後弁当づくりが待っている。

「今日は、田植えをしてきて真っ黒になった子供たちの衣類の洗濯が大変でした。でもみんなほんとに可愛いし、楽しい経験をさせてもらっていると思っています。実際は結構ハードだけど、損得ではない楽しさですよ。冬には家族と一緒にやってくる子もいたりしてね」と繁美さんは母親のような笑顔を見せてる。

翌日は新潟県能生町の海辺で地引き網を引く予定だった。ところが海が時化で、地引き網は中止になった。子供たちは海辺の水族館や市場を見学して、漁業の町の雰囲気満喫した。明日はブナの森のハイキング。そして寺めぐりや野菜の集荷場見学、わら草履づくりと、楽しい活動が続く。

取材を終え、子供たちの帰京後に学校を訪ねた。ちょうどこの日、学校では保護者や地域の教育関係者などを迎えて、セカンドスクールの報告発表会が行なわれた。

田んぼの水をベットボトルに詰めて持ち帰り観察した子、お米の作り方を発表した子、自分で作ったわら草履をすつと愛用している子。田んぼの雑草の名を全部覚えた子。子供たちにとってのセカンドスクールは、大人が思っていたより遙かに強烈な種を、その心に蒔いたようだった。

「ご飯はもうぜったいに残さないという子が増えましたね。それと親以外の大人に本当に優しくしてもらった、その経験が子供たちを優しくしてるんですね。子供同士が以前よりずつと仲良くなりましたし、家でも家事を手伝う子が増えたようです」と鈴木恒雄先生。

「モノはお店で売られている。その先のイメージはなかった子供たちですが、お米や野菜や草履が出来るまでにどれほどの手間がかかっているか、それを実感できたのもいい体験でしたな」と荒木校長先生も喜ぶ。

一年に及ぶ準備期間を経て、密度の濃い、貴重な体験学習を実施した第四小学校と戸狩地区。「地元の方たちの熱意と誠実さが、この取り組みのすべてを支えていました」という荒木校長先生だが、学校側の準備や細かな配慮も成功の大きな要素となった筈だった。

子供たちの胸には今も、戸狩のでっかい空や民宿のお父さんお母さん、そしてへびやイモリや四つ葉のクローバーが、ピッカピカの思い出となって輝いていることだろう。

文/金山淑子 カメラ/小林恵

### 武蔵野市セカンドスクール スケジュール表(平成14年度)

学校名	実施日	実施場所
第一小学校	9月末～10月	7泊8日 飯山市信濃平
第二小学校	9月下旬	7泊8日 富山県利賀村
第三小学校	6月中旬	8泊9日 飯山市信濃平
第四小学校	5月末～6月	7泊8日 飯山市戸狩
第五小学校	5月末～6月	7泊8日 酒田市羽黒町
大野田小学校	6月中旬	6泊7日 飯山市信濃平
境南小学校	9月中旬	6泊7日 飯山市戸狩
本宿小学校	6月中旬	7泊8日 飯山市信濃平
千川小学校	9月末	7泊8日 千葉県銚子市
井之頭小学校	9月中旬	7泊8日 飯山市信濃平
関前小学校	9月末～10月	9泊10日 山形県遊佐町
桜野小学校	6月中旬	6泊7日 富山県利賀村
第一中学校	10月中旬	4泊5日 山梨県足和田村
第二中学校	5月下旬	4泊5日 新潟県松之山町
第三中学校	5月下旬	4泊5日 長野県大町市
第四中学校	6月下旬	4泊5日 " 飯田市
第五中学校	9月下旬	4泊5日 " 豊科町
第六中学校	9月中旬	4泊5日 " 豊科町

(2002.4.1現在)



新潟県能生町で漁港体験学習したあと、美しい日本海を眺めながら昼食会。その前に記念撮影!

13アールという広い田んぼで  
田植えをする子供たち。



# 田んぼで森で、子供たちは労働の辛さも楽しさも味わう 第三小5年生／飯山市信濃平民宿の9日間

## 田んぼの畦道で蛙 オタマジャクシ探し

武蔵野市立第三小5年生の飯山市でのセカンドスクールは、6月20日から28日までの9日間、飯山市信濃平民宿村で行われた。例年8日間だった合宿が今年からさらに一日増えて、子供たちは民宿の「子供」になって、どつぶり田舎の暮らしを体験した。

地域の様子や畑の作物、池にいる魚や昆虫

のこともほぼ知りつくしてセカンドスクールも後半にさしかかった25日の午後、田植え教室が行われた。

梅雨の合間、雨は降らなかつたものの気温は低くて肌寒い。子供たちは半袖シャツにズボンをまくし上げて13アールという広い田に入って田植え作業を行った。一カ月前に田植えを終えた周りの田では根を張った苗が倍近くに成長している。今日の日のために信濃平の人たちが田植えをせず待っていてくれたのである。だから子供たちも真剣に田植えをする。

民宿のお父さんやお母さん、指導員の若者たちが手伝いながら、約2時間半で苗は綺麗に植えられた。「寒かつたけど田んぼの中は温かくて気持ちよかつたよ」と泥んこになり唇が青ざめながら田から上がった子供たちは、道脇の小川で手足を洗う。

世話人代表の鈴荘のご主人は「子供たちの人数に合わせて田んぼを用意しておくんです。一カ月遅れなので心配したけれど、昨年は他の田の4割減で収穫できた。ここで6俵は収穫できるから皆にたっぷり食べてもらえます」といふ。

稲刈りには武蔵野市から先生たちが手伝いに来ることになっている。

三小の校長として4年目、毎年セカンドスクールに参加している星野昌治校長は土手で田植えの様子を見守りながら「寒い日だけけど子供は臆せずよく働きました」と言い、着替え等を手伝う。余った苗の一部を学校へ持つていく手配も。

9日間の体験学習について、「一つの体験



に時間をかけてやらせてあげたい。他の地区へ出かけた時、漁業体験等を組み入れる学校もあります。ここは風光明媚な豊かな自然があるので他へ行く必要がない。民宿がいろいろのメニューを用意してくれますので、おまかせしています。ゆっくり時間をかけて学び、体験する。手、耳、目等の感覚を使って学んで欲しいと思っています」と語る。

三小5年生の数は71名。8つの民宿に8、9名ずつ泊まり、指導員の学生等が一人ずつ付くが、先生は「本部」と呼ばれる民宿・鈴荘にいる。

その日の午前は民宿の計画したいろいろのメニューを楽しんだ。お焼き、そば打ち、野草等を使った染色、あけびつる細工等々。子供たちは学習したいものに合わせて、その民宿へ出かけていく。

田植えを終えた子供たちは、田んぼや用水

上／田植えを指導する鈴荘のご主人（中央）  
下／田植えのあとはオタマジャクシや蛙取りに夢中。一時間近くかけて宿へ戻った。





路、土手にいるオタマジャクシや孵化したばかりの蛙を取るのに夢中である。ビニール袋にオタマジャクシを沢山捕獲、民宿のカメに入れて蛙になるのを観察するらしい。掌のなかには青蛙の子供がしっかりと握られている。「いいな、いいな」と言つた女の子に、男の子が「大事にせえよ」と言つて一匹手渡す。「からだを乾かしてはダメだ。水分が大切だよ」と指導員の青年が濡れた葉っぱを取ってきて蛙を包んでやる。

こうして子供たちは、宿まで歩いて5、6分の道を1時間近くかけて道草して帰る。畑仕事をする老人が「子供の賑やかな声は本当にいいもんだねえ」と見送った。

夜になると小雨が降り始め、先生たちは観光協会の佐藤さんらと打合せをして、その夜予定していたキャンプファイヤーを中止した。スキー場だった裏山の山頂近くまで登つて行つたため、雨の日は断念。数日前の昼間にキャンプファイヤーの練習をしてきた子供たちはがっかりしながらも、夕食後はそれぞれにゲームや昼間制作したあけび細工等の整

理、学習等をしてゆったり過ごした。ちなみにその頃はサッカーW杯で世の中は連日テレビの前に釘付けになっていたが、民宿の人も子供たちもそのことを全く忘れていたようだ。

先生方の泊まる民宿に熱を出したという子供の連絡が入った。養護の先生と担任の先生が町の医者に連絡を取り車に乗せて診療に行つた。昨日は喘息の児童が一人止むなく帰京している。出発前から体調不良だったが、本人の希望でセカンドスクールに参加、「出来るところまでやらせたい」と先生たちも応援して、5日間の田舎生活を味わって帰つていった。熱を出した男の子は風邪をひいたらしく、その夜は鈴荘へ移し養護の先生が付き添って寝た。

「ふるさと体験」の発祥地・信濃平

長野県最北端に位置する飯山市は斑尾山、黒岩山、鎌倉山が連なり、その麓の集落はスキー・民宿等で賑わってきた。ギフチョウやカタクリ、モリアオガエル等の貴重な動植物の生息地である黒岩山(938m)を背景に広がる信濃平(約300戸)は、豊かな自然に加えて、雪国や信濃の伝統文化を伝承してきた地域でもある。スキー・民宿だけではなく新緑や紅葉の美しい田園、風土食などを都会の子供たちに味わってほしいと、地域、市、JAが協力して「ふるさと体験」活動に取り組んで受け入れ、その実績を元に武蔵野市へも「来てもらえませんか」と呼びかけた。当時武蔵野市のセカンドスクールは、92年に長野県八坂村において6泊7日で施行したのが始まりでその後も岩手県遠野市で試行を続けていたが、宿泊する民宿、教師の勤務体制等で



悩んでいた。信濃平の民宿を利用したカリキュラムに賛同し、97年に三小と本宿小の2校がやってきた。

信濃平観光協会の佐藤清孝さん(49)は「民宿村をやるに当たっては、まず自分たちの地域、風土に誇りを持って、各人が伝統文化や暮らしを学び直すことからはじめた。それがこの地域の特色で魅力になっていっていると思います」と言つた。

とはいっても田舎も都市化により失ったものが多かった。農業を使わない稲作・野菜づくり、そばやお焼き等の田舎料理の復元、竹とんぼや凧、わら草履などの昔の遊びの復活、手作業による田植え等に加えて、子供たちが自然の中で楽しめるキャンプやバーベキューなどの新メニュー、歩きながら花を摘んだりブドウやイチゴが食べられる環境づくり等にも徐々に取り組んできている。

「民宿村では夏休みに10日間子供が体験学習

上/今日は「森の家」で学習。「行ってきまーす」と宿を出る子供たち。  
下/三々五々、各民宿から集まってきた子供たち。もう地元の児童のように手慣れた道だ。

するコースを用意しています。父兄は入れず子供だけが参加するもので、主役は子供、相手は自然と民宿の人たち。親や先生は脇役です」

そう言い切れるのは、子供たちとことん向き合い、責任をもって世話をするという長年の実績、自信の証だろう。佐藤さんも子供たちのいる現場には必ず付き添い、翌日の「森林体験学習」では、田植えのあと足を傷めたという女の子を終始おんぶしていた。

「嬉しいことに、民宿を営む家に息子たちが戻ったり後継しはじめています。最近冬のかまから体験を始めましたが、若い人の協力が無いと成功しない。これからは若者の夢や新しい感性を加えて、さらに魅力ある民宿村をめざします」と佐藤さんは語っていた。

夜、若者のいる民宿の一つ「ゆあず」の足立信吾さん(26)を訪ねた。築20年という洋風な建物で、広いダイニングテーブルで8人の子供と指導員の露木大輔君(大学2年)、信吾さんが夕食を取っている。献立は野菜た

つぶりのジャンボコロッケ。

「信ちゃん」と呼ばれて人気者の信吾さんは、大学を出て地元に戻った。食事の用意等は両親と祖母がやり、信吾さんは子供たちと過ごしている。「信ちゃんは何でも知っていて教えてくれるよ」「笹餅も上手に作るよ」「虫博士だよ」と子供たちが言う。

「ホームシックになった子は？」と聞くと「全然ない！」と即全員から返事が返ってきた。「最初の夜は眠れない子供もいましたが、あとはよく遊びよく寝ています」と信吾さん。今年初めて指導員として参加した露木君は「僕自身が大変勉強させてもらっています。皆遅しく生き生きして、何にでも積極的で...」といい、それを聞いた子供がさかさ「いいこと言うねえ」とからかう。ここでは4人が喘息を患っているというが、発作もなく健康な日々を送っているようだ。

高原荘の栗岩保子(53)さんと光宏さん(22)を訪ねた。子供たちが近くの民宿へ遊

びに出かけた一、二時間に掃除や田植えで汚れた洋服の洗濯をして帰宅を待つ。

「つちは一番古い民宿でトイレもポットントイレなんです。お米も野菜も沢山作っていて完全無農薬なので結構忙しいんですけど、都市の子供には、農家のありのままの暮らしを体験してほしいと、民宿本来の姿を守っています」と保子お母さん。

彼女は民話を語れ

る貴重な存在で、食べ物がなく生まれた子供を泣く泣く生き埋めにしたという『甘酒村』の話は多くの子供たちに涙とショックを与えてきた。

「私は秋山郷の生まれで、小さい時から婆っちゃんいろいろな民話を聞いて育ったの。今ではこの地方の60代の人も標準語で話すようになったので、私は民話には方言を使って語るようにしている。お金を出せば何でも食べられる今と違って昔は大変だったんだ、子供には手えつけたら残さず全部食べと言っの」保子さんは今年三小から「方言講座」を頼まれている。

光宏さんは三男、子供相手の仕事をしたいと保育園の学校をめざしていたが、家の民宿業と農業を手伝うことになった。

「どこにも負けない上手い米と有機野菜を食べてもらうのがわが家の方針です。ここにはお袋を募ってか、ただいま」といつて来てくれる家族客も多いんですが、不景気を反映して旅行者や子供の体験学習も日程を減らす傾向にあります。私達もますます魅力ある民宿づくりを考えないと...。わが家もポットントイレを水洗に改装します」と言う光宏さんに「子供の日記や便りには『ウォートイレだ！』『ウォーがあったぞ！』などと書いてあるの。田舎にはこういう便所があるのだということも伝えたいのね」とお母さん。「外に一つウォーを残してあげますよ」と息子。

楽しい親子である。

### 山で枝打ち作業

翌朝は民宿が用意してくれた弁当を持ってなべくら高原の「森の家」へ。民宿村の3台のバスに乗り、宿のお父さんたちが運転して9時に出発した。6haを超える敷地を囲んでブナやケヤキ、ヤブツバキなどの森があり、



夕食を取るゆあずの足立さんと(右)子供たち



高原荘の栗岩さん親子

上から / 森で間伐作業をする前にインストラクターの人たちから説明や注意を聞く。林に入って下草刈りや枝の除伐開始。ノコギリの使い方も上手になった女の子。



切り取った小枝を集めて林の外へ運び出す

森の家ターミナルハウスの周辺には宿泊できる木造のおしゃれなコテージや林業体験をするための広場、林、炭焼き小屋等がある。

バスで約30分、森の家へ着くとインストラクターの人たちが5人出迎えてくれた。

「今日は森へ入って要らない木や枝を切る除伐作業をします…」と指導員の人から説明があり、子供たちは荷物を預け、持参の軍手をはめて近くの林へ移動した。

大小2種のノコギリとヘルメットが用意されており、5つのグループに分かれて作業することになる。山へ入って木や枝を切る人、それを運び出す人、運び出した枝等をさらに切って整理する人。はじめて見る本物の大きなノコギリの前に子供たちは少し緊張気味。

インストラクターの人が「木を切ってはいけないと思う人？」と聞くと大半の児童が手をあげた。そこで指導員の方は、日本の森は人の手によって管理されてきたので間伐や下草刈りが欠かせないこと、いまは木材が安くなり山へ入って林業をする人が少なく

なり山が荒れていること等を話し、そのあとノコギリの使い方を説明した。

間伐作業をする林はすぐそばにあり、一帯は雑木林で手入れしてこなかったために樹木は曲がったり蔭が絡みついたりしている。貴重な雪ツバキも群生しているが豪雪地帯のため根曲がりし素直には生長していない。指導員の指導で切る枝や木を決めて男子がまず作業を始めた。初めての体験、ノコギリの当てる方、動かし方などを校長先生も忙しく指導に当たる。小枝ではノコギリが使いにくいいため、いきなり大きな木を切ろうとする子供も出てきてひやっとする場面も多かった。あらかじめ切つていい木や枝に印をしておいてもらえばよかったのと思ったが、観光協会の佐藤さんは「剪定する木選びも子供の自主性に任せているのでしょう」とけろり。

子供たちのお喋りは少なくなり、作業を交代・分担しながらよく働いた。切り出した枝はかなり重いので運び出す女子たちも重労働だ。さすが男子はノコギリをいち早くマスタ



ブナ林を散策する子供たち。幹が水を吸い上げる音を聞く。



し、1m程に切断する作業を楽しんでいる。作業は約1時間で終了したが、子供たちは「疲れた」「重労働だった」と汗をぬぐい、森林作業がいかに大変かを実感した。切った木は乾かして木工づくりの材料となり、午後は森の家でペンダントをつくる体験教室が待っ

## 21世紀の最大テーマは 都市と農山漁村との交流

土屋正忠・武蔵野市市長

2DKのアパートに家族5人で暮らしていた時、二人の息子が家の中で飛び跳ねると「近所に迷惑をかけるから」と制し、こんなことをしていたら子供はダメになってしまうと思った。当時すでに家の中で一人で遊ぶ子供が増えていた。PTAの仕事をしていた時、校庭開放を提案、これは市長になって実現した。学校の朝礼で児童がバタバタ倒れたり、満天の星空を見て「気持ち悪い」という子供がいたりして、運動能力の低下、自然を美しいと感じる心の喪失。人間が自然の中にいることを都市生活が失わせている。これはヒト族の危機ではないかと思った。

どんな子供も山村へ行けるようなカリキュラムを学校で考えてほしいと教育委員会にポールを投げた。教委は検討委員会を作り応えている。

一息したあとは周辺の森の散策へ。梅雨で湿った森の道は滑りやすいが、多種多様な植物が一斉に葉を伸ばし花をつけ、子供たちの話題は尽きない。池の脇をぬけてしばらく行くと、急に明るい世界が飛び込んできて、ブナの原生林へ到着した。樹齢200〜300年の形のいいブナが茂り、周辺の二次林もよく手入れされている。信州ではブナの巨木を「森太郎」とよんで敬い、水源の森として大切にしてきたことを学んだあと、子供たちは幹に耳を当てて、木の中を流れる水の音を聞く。

ブナ林の下には林業で生きてきた農家の小

てくれた。校長や指導主事と北アルプスに登り、子供たちが星の下で語り合うような発想が必要ではないかと持ちかけた。

構想してから17、18年、市長になってから10年、武蔵野市のセカンドスクールが実現した。現在セカンドスクールの予算は約1億円。かなりの大金だが、子供たちの未来のためには価値があると思う。私も毎年一、二カ所は見に行き、泥だらけになって一緒に体験してくる。

21世紀の最大テーマは、都市と農山漁村との交流だと思っている。都市の繁栄は脆弱な基盤に立ち、食糧一つとっても生存に必要なものはすべて田舎から供給されている。その田舎はどんどん衰退しているのに人々は都市だけで繁栄できるような錯覚に陥っている。都市と田舎が共存することで都市の閉塞状況は突破でき、田舎は過疎を克服する活力が生まみ出せる。セカンドスクールをそうした交流の場にした。

『へ／緑の教室 武蔵野市セカンドスクールの挑戦』  
(小学館)より

さな集落があった。3mの豪雪地帯、藁葺民家も今はトタンを被せてひっそりしている。

「もうお年寄りしか住んでいないのかなあ」と女の子が心配そうに呟いていた。

星野校長が「飯山へきて子供たちは確実に変わっていきます。まず目付きが生き生きしてくる、前へ前へと考え行動するようになります。後で親たちから、子供が素直になりました。家のことを手伝うようになったとよく言われ、不登校児的な子が元気に登校しはじめます」と語った言葉をかみしめた。2日間でも子供たちから沢山のことを学んだと思う。

文/浅井登美子 カメラ/小林恵

- ・武蔵野市教育委員会教育部指導課 ☎0422-60-1897
- ・飯山市信濃平観光協会 ☎0269-62-2225
- ・戸狩観光協会 ☎0269-65-3161



ふるさとの自然や  
暮らしを学ぶ

地方に住む子供達でも、農業を手伝う機会がほとんどなくなり、自然や農林業、伝統産業等への関心が薄れている。そのため小学校が田んぼを借りて田植えや稲刈りなどを体験学習する取り組みが各地で行われるようになった。須玉町には旧校舎を活用した体験施設「大正館」があり、地域の子供達に田舎暮らしの魅力と関心を高めるための行事を手がけているが、今年から町と学校、大正館が協力して米づくりを主体にしたふるさと学習をスタートさせた。



## 米づくりを通してふるさと学習

体験施設「大正館」を拠点に（山梨県須玉町）

三代校舎は体験・交流施設として大もて

八ヶ岳の麓にあり、東側に南アルプスの雄峰を望む自然郷・須玉町（人口7220人）。三代校舎ふれあいの里“のネーミングで知られる「大正館」は、古い歴史と水田・果樹を主体にした農業の盛んな丘陵地・津金地区にある。地域を望む見晴らしのいい場所に明治以来地元の人たちが学んできた小学校があるが、いまは廃校となり、町の農業体験・校外学習用施設として改装され、人気を呼んでいる。

広い校庭の右側に建つのが明治初期に外国の建築様式を真似て建てられた擬洋風木造校舎で、解体復元されて須玉町歴史資料館として活用されている（山梨県指定文化財）。その左に建つのが大正13年に完成した平屋建ての大正校舎で、改装されて体験学習施設に。間仕切りのない広い木造教室と廊下は、ほうとう、そばうち、木工・竹細工等の学習の場にもぴったりで、その日も東京目黒区の中学生在が「ほうとうづくり」に訪れることになっている。左に建つのが昭和28年に落成した昭和校舎で、こちらは平成12年に宿泊・レストラン・パン工房・農産物売店を持つ総合観光施設「おいしい学校」として生まれ変わり、県内外から多くの観光客が訪れる津金の活性化拠点になっている。

さて、須玉町の児童を対象にした農業体験学習では小学5年生の田植え学習が「大正館」の前の田んぼを借りて行われることになり、一年間しっかりと実施体験して総合学習に生かして欲しいと町長や教育委員会・農林課職員も応援に駆けつけた。田んぼを借りる手配や管理、子供達への指導は大正館館長浅川定正さんがかねてより熱心に企画してきたもので、地域の人たちが快く協力してくれた。



「昔は子供達も野良作業をよく手伝いましたが、いまは機械化されてきたこともあり、ほとんどの子供が農作業を体験していません。農家の苦労や働く喜びを肌で感じて身に付けて欲しいと、大正館が農家から7a借りて学校農園として運用していくことになりました」と浅川さんは語る。

田植えの後も田の草とり、稲刈りまで子供達で

午前9時、バスに乗った須玉小学校5年生の子供達66名が到着した。田んぼの脇に集合して町長、館長、先生達の挨拶や説明を受ける。この日のために準備してきた農家の人たちも7、8人来て、田植えの指導に当たる。午前8時半に一番乗りで到着した中田欽哉町長が、「ここは古くから美味しいお米や果実の採れる地域で、みなさんの両親が子供の頃は春と秋に農繁休暇があり、田植えや稲刈り



右上 / 明治小学校（須玉町歴史資料館）  
右下 / 体験施設・大正館と広い校庭  
左 / 昭和の小学校「おいしい学校」内部



苗を持つ手つきもサマになってきた男の子たち。



田植えの前に町長、先生たちが学習方法と注意を述べる。

川さんとお米等についての質疑応答、感想発表して来た。

田んぼ脇の用水で泥を落としさっぱりした後は、旧津金小のグラウンドで持参した昼食を「美味しい！」と食べて、午後からは浅川さんとお米等についての質疑応答、感想発表して来た。

5年生の担任・興水先生は「田植えだけでなく田の草取りや水の管理、稲刈り、脱穀にも子供達を参加させていきます。自分達の育てる稲とお米は学習の場としても貴重で、ご飯や食に関心を持つ機会になると期待しています」と言う。学校では田植えの前に農家の人たちが田起こしや代かき作業をする様子も見学してきた。

り、家のことを手伝いました。学校では今まで小さな田をつくり稲の観察等をしてきましたが、今年から総合学習の一つとして広い田んぼを学校農園にしてみなさんにもいろいろお手伝いしてもらいます。毎日食べているお米がどうやって育ち作られるかを知って大切に食べましょう。裸足になって田んぼに入り体で感じてください」と挨拶した。

66名のうち、田植えの経験がある児童はわずか9名で、機械植えや動機に出るためJA等に農作業を依頼するケースが増えている。子供達は3班に分かれて田んぼへ入った。みんな水に入ったとたん足が深い泥に取られるせいか「気持ち悪い」「冷たい」と大騒ぎ。農家の主婦が田の両サイドで綱を張り、それに併せて苗を植えていく。坂本宗子校長先生も子供の列に加わり指導したり植え直したりと大忙し。はじめは時間がかかり下手だった子供達だが、3列、4列あたりから手際良くなり、無駄口も消えて、真剣に楽しんで田植えをしている。

6、7人のグループに分かれて、用意された10脚ほどのテーブルに付く。地域のお母さんたちの指導で甲州名物ほうとうづくりがはじまった。大きなボールに入った小麦粉に熱

この日は朝7時半に東京を出発してきたという目黒区立第七中学校の1年生が10時半に大正館に到着した。バスを降りた66名の生徒は「空気が美味しいね」などと言いながら校庭に整列、先生や大正館館長の説明を受けたあと着替えて大正館の広間へ。

目黒区の生徒が「ほうとう」を作って昼食会

表会。「はじめてやったけどとても楽しかった」「来年も田植えしたい」などの声が聞かれた。学校へ戻り感想文や観察記録をまとめることになっている。



▶上ノ一番乗りでかけつけた中田町長  
下ノ浅川・大正館館長  
▲坂本校長も田に入って指導に当たる



打ち上がったほうとうを使った昼食膳

湯を注いで練っていく。固めながら力を入れて練り返し練り上げていくことがコツだが、意外と難しく、粘り気のある球状にならない。それでも全員が交代しながらこねていくうちにしっとりときめ細かい球状が完成。続いてそれを台に乗せ綿棒でのしていく。この作業は指導のお母さんが何度もアドバイスしながら行われ、やがて薄い生地が仕上がっていった。「これをお昼に食べるんだよ、頑張ったね」と先生たちも励まして歩いてきた。出来上がった生地をたたんで包丁で切ると、ほうとうの完成。一つ一つの作業を楽しそうにみんなが交代しながら行うのには感心し

た。それを台所へ運び、テーブルを片付けたあと、明治初期に建築された郷土資料館を見学、帰ってくる途中料理が出来上がった。カボチャ等の野菜がたっぷり入った味噌仕立ての中に生徒が作ったほうとうが入ったスペシャルランチ。「おいしい」、「うめーなあ」と言いながらしつかり食べて、男子はお代わりも多かった。

目黒区立第七中学校（目黒区碑文谷）は毎年一年生が2泊3日で「移動教室」を実施、宿泊には清里にある区立八ヶ岳林間学園を利用しているが、自然とのふれあいや地域社会への理解を深めたいと、大正館でのほうとう作り、翌日は八ヶ岳中央農業実践大学校での農林体験学習等を行っている。

松村由紀子校長は「昨年から須玉町でのほうとう作りを始めました。体験した生徒に大変人気があるんです。今は田舎でも都市でも



粉からこねて食べ物を作るという風習は減っていますので、こういう体験は貴重です。地域のお年寄りたちの協力で自分達の作ったものを戴けるといのがまた嬉しいんですね」と語る。

子供達が食べ慣れている肉料理や揚げ物はないけれど、旬の野菜と漬物、手造り味噌でもてなす地域のお母さん達も「子供達が一生懸命粉を練り美味しいと言ってくれるのがとても嬉しく、張り合いを感じます」と言っていた。

翌日は6時に起床、7時に朝食を取った生徒たちは八ヶ岳の農業実践大学へ入校し、牛や馬にふれたり牛舎の掃除、餌やりなどを一日体験した。

『大正館』 ☎0551(20)7200

文/浅井登美子 カメラ/小林恵

上から / 男子生徒のほうとう生地作り。地元のお母さんが生地をのばして見せる。出来上がった「ほうとう料理」に舌つづみ。

新緑が美しい岳岱のブナ林。斉藤さんから説明を聞く子供たち。

雨天にも関わらず、白神・岳岱のブナ林は新緑に明るく輝き、雨は枝葉が受け止めてくれるので子供たちにはやさしい霧雨。枝々から集められた水滴は幹に小さな小川をつくり、根元から地中に注がれる。駒ヶ岳への登山は中止になったが、子供たちは森で多くのことを学び、この森を将来にわたって守っていかなければならないと感じた。

### 白神山地の世界自然遺産登録に 貢献した町

白神山地は秋田、青森県の県境に位置する標高1000m級の山岳地帯。縄文時代から続くブナ原生林は多種多様な動植物群が生息する豊かな生態系をつくり、世界最大規模のブナ自然林を誇っている。イヌワシ、クマガエラに代表される稀少動植物の聖地であること



## 白神山地はなぜ世界自然遺産になったの？ ブナ林で体験学習

### 秋田県藤里町小学生の取り組み

も注目され、平成5年に白神山地の中核部1万6971ha（秋田県側4344ha、青森県側1万2627ha）が屋久島と共に世界自然遺産に登録された。

世界自然遺産に登録されて以来、白神山地への観光客は急増、山麓の八森町、藤里町（秋田県）、西目屋村（青森県）には、自然解説とフィールド情報を提供する「世界遺産センター」や宿泊施設、観光物産店などが出来て、観光地として活気を呈している。

藤里町は登録地（白神山地自然環境保全地区）の東山麓にあり、美しいブナの自然林・岳岱、田苗代湿原、白神を一望出来る駒ヶ岳（標高1158m）等があり、四季折々のブナ林の魅力と比較的身近に見学することができる。また、かつて白神山地を横断する青秋林道、一の又林道、大滝林道の三本の開設計画が持ち上がった時には、「貴重な自然と生態系を破壊する」と住民の反対運動が起きた地域でもある。

小学生の駒ヶ岳登山、「秋田自然を守る少年団」の活動は28年に及ぶ実績があるが、大半の人々は森へ入ることもなく林道開設工事を知らない状況で、ブナ原生林が分断する寸



前であることを知った。「秋田自然を守る友の会」(少年団の母体)会長鎌田孝一さん等は、貴重な植物層、クマガイウの子育て写真等を見せ、ブナ林の保水能力等を説明して工事の中止を訴えた。「皆で森へ出かけよう、藤里にはこんなに素晴らしい自然がある」という「ふるさと学習」は、やがて住民と行政一体となって進められ、それが白神の世界遺産登録にも大きな役割を担った。

### 雨の森で「自然からの恵み」を 実感する

6月11日、夜明けから降り出した雨は本格化しそうな空模様である。小学5年生の白駒ヶ岳登山を主催する町の教育委員会に連絡を取ると、役場へ車を走らせた。計画のメインである駒ヶ岳登山と田苗代湿原行きは中止するものの、岳岱での「森林教室」は実施するという。役場の車に同乗させてもらい藤里小学校へ行くと、米田小学校5年生の乗ったバスはすでに到着、藤里小の子供たちは佐藤校長の挨拶を受けていた。

「あいにくの雨ですが、雨の日のブナ林では普段気付かなかったものが発見できるでしょう。皆しっかり見学してきてください」「はい」と子供たちは元気良く答えてバスへ。

山沿いにある白神山世界遺産センター藤里館で、ネイチャーガイドの斉藤栄作さんと市川善吉さんが出迎える。子供たちは整列しなおし、「これから森林教室を開校します」と米田小の女の子が挨拶、続いて先生やガイドさんが説明や注意事項等を述べたあと、合羽を着た軽装でバスに乗り込んだ。

藤里町(人口4630人)の場合も少子高齢化が進み、5年生は藤里小が35人、素波里ダム手前地区の米田小は8人。このうち、岳岱等の森や湿原を訪ねたことのある児童は約

半数だった。町中の子供がまだ行っていないようだ。

「近頃は山へ入るのは森林作業員が山菜採りの人達だけで、一般の人は滅多に行きません。岳岱に行っている子供や親の多くは20年前に結成した『秋田自然を守る少年団』等に入っ

て先輩から後輩へと森の素晴らしさと大切さを学んできた人達。山へ行く機会のない親たちも5年生の『森林教室』に期待しています」と教育委員会社会教育担当の櫻田博さん。櫻田さんも友の会の会員だった。

いま町や自然保護関係者が頭を悩ましているのが急増した観光客。シーズンの休日には一日300人を越える人が岳岱を訪れる。昨年は林道の一部が破損したため4〜7月まで閉鎖、8〜10月で3万人が訪れた。山は緑色岩の軽石状凝灰岩なので崩れやすい。それを防いできたのがブナや落葉樹。



上/バスで到着した藤里小・米田小の児童たち。  
中/ふわふわした腐葉土を取って説明する斉藤さん。  
下/虫が食べたブナの実などを拾って見せる市川さん。

岳岱までは湯の沢から約27km、車で50分ほどの距離。道路脇には秋田天然杉の巨木も見えてきた。「ブナのみずみずしい緑と濃緑の杉の木のコントラストがいいんです。数百年の風雪に耐えてきた天然杉は県の銘木で一本1000万円するものもあります。秋田営林局は伐採を計画しましたが、藤里町観光協会が町と町議会に要望書を提出、秋田営林局に



岳岱一の巨木は右側の枝が折倒してしまった



30年来自然保護活動や子供達の森林体験に取り組んできた鎌田孝一さん



ホテル「ゆとりあ藤里」。ホテルはゆったりとした間取りの和洋室が21室(100名)あり天然温泉の大浴室や温水プール付。白神に魅せられて来て訳あって支配人になってしまったという白土延子さんと、時には宿泊客を山へガイドするフロント係桂田さん。ホテルゆとりあ藤里  
☎0185-79-1070



る大自然があることを知らずに都市や県外に出ていく若者たちをみて、子供の時期に自分の住んでいる町や自然を体験学習させたいと、町内4小学校の校長等の了解と協力を得て、50年春「秋田自然を守る少年団」を結成した。対象は柔軟で知的行動に適した小学校5、6年生で団員数は50名(マイクローバス2台分)。学校の協力もあり50名はすぐ集まった。同年6月、役場を2台のマイクローバスで出発して、県立自然公園・太良溪谷を5km歩くと、荒々しい自然にふれて子供たちは感動し、危険な箇所は協力しあった。クルマ三台キャンプ場で結団式と昼食。帰宅する子供たちは生き生きして頼もしくさえ見えたという。

続いて夏休みは駒ヶ岳登山をし、帰路には周辺のゴミを拾うクリーンアップ活動をした。集めた空き缶は一部だったが軽トラック一台分を越えた。登山道がきれいになるには何年もかかるだろうと溜め息をつきつつ、少年団活動として行うには少し無理だという反省も。そのため秋の自然教室では入山する車両や観光客にゴミの持ちかえりパンフ等を手渡して声をかけた。

このようにして少年団は、毎年コースや昼食メニューを替えながら、まだ無名だったブ

ナノ森、岳岱へと足を伸ばしていった。「当時はまだ林道が開通していないので1時間は歩く。白神山地を見た子供の感動と。自然って遠いんだな」という呟きが私達指導する側の原点になりました」と鎌田さんは言う。

町がバス代を助成、学校も協力してくれて活動は活発に続けられ、25年で1000名以上の少年少女が巣立っていったが、児童数の減少やスポーツ教室参加で日程が合わない等の理由から、現在少年会員は21名に落ち込んでいる。全国の自然保護関係者や文化人も注目してきた少年団、25周年記念誌には少年少女や元会員だった親達が素晴らしい体験だと熱いメッセージを寄せている。

今後は周辺町村や都市の子供たちにも呼びかけて、この活動を持続して行って欲しいと願わずにはいられない。

自然保護と共に自然を生かした観光の振興にも力を入れてきた鎌田さんは、いち早く「白神山地」を商標登録しよう行政や観光協会に呼びかけ、ワイン、山菜、美味しい水を使った商品開発にも協力してきた。しかし昨今の観光客には頭を悩ますことも多いという。

「我々ガイドは田苗代湿原などに案内して山野草の説明をしますが、翌日になるとその野草が消えていることがよくあるんです。そのために最近では貴重な植物については教えないようにして保護しています。子供たちの純粋さにくらべると大人は傲慢です。自然や森からの恩恵をつい忘れてしまい、利害でものをみてしまう。

もう一つ困るのがアマチュアカメラマンたち。いい写真を撮りたいからと平気で歩道から入っていく。いすれマイカー規制や環境税の導入も図っていく必要があります」と語っていた。

文/浅井登美子 カメラ/小林恵



▲ゴミ収集活動をする「秋田自然を守る少年団」  
◀紅葉のブナ林で(撮影/鎌田孝一氏)



エコクラブの人たちも指導、参加して  
頓別川でカヌー体験教室。

## 北の大地と人が織りなす総合的学習 「ピンネの広場」から探検・発見・ 発信 敏音知小学校(北海道中頓別町)

「総合学習」を本格的に導入

中頓別町は北海道オホーツク地方の内陸部にある自然郷で、人口は約2610人。町には3つの小学校があり、敏音知小学校は敏音知岳(標高704m)の麓に広がる酪農地帯(約20戸)のなかにある古い歴史を持つ学校。最大155名(大正7年)だった児童は年々減って現在9名になってしまったが、子供たちは一人ひとりが地域の一員としての自覚を持ちながら逞しく輝いて学んでいる。

同校では自然や地域学習に早くから取り組んできたが、2年前より安田正志校長の下で、総合的学習を取り入れた授業をスタートした。「ここにはどこにも負けない素晴らしい自然と、自然とともに暮らしてきた農家や地域の人々がいます。しかし大人も子供も忙しくなると、山や川へ行って遊んだり野鳥や昆虫に親しんだりする機会が減ってきています。総合的学習の中で、もっと自然にふれたり地域の人から学ぶ機会を持ちたいと考えました」と安田校長は語る。

「ピンネの広場」と名付けて様々な活動を展開、これらの授業の内容は校長自らがパソコンで「ピンネシリ」という学校新聞にまとめて各家庭にも配布されている。

この学習は、全校規模で行う「B領域」と学級単位で取り組む「A領域」があり、学習内容に応じて進めている。

6月中旬には敏音知岳(704m)山開きを全校活動として行うが、低学年は山麓を探索して草花を使った絵画づくりを学習し、3年生以上が山頂をめざす。1時間40分で山頂に着くが、当日は登山マラソンも実施され、1着の選手は30分程で登頂して皆を驚かせた。山頂から雄大な宗谷の風景を堪能したあとは、下山して合流。皆で「山賊なべ」

を囲んで昼食した後、感想発表やイベントを楽しんだ。

川にもっと親しんで欲しい

敏音知岳の麓には頓別川が流れている。大自然の中をゆったり流れて、浜頓別町を経て太平洋に注ぎ、鮭も遡上してくる川。6月24日にはここで「川調べ学習」が行われた。学級単位に水辺に生息する生き物などを学習したあとは、カヌー体験教室。エコクラブ・サポーターの田辺毅さんや中頓別小の小泉先生の指導で、5艘のカヌーに乗って本格的な川下りを楽しんだ。

田辺さん(44)は町の商店街で電器店を経営しているが、趣味と実益を兼ねて養蜂をやったり、カナディアンカヌーの制作とカヌーによる川遊び教室、ホタルの里づくり、野鳥観察会を行うなど、地域おこしリーダーとしてなくてはならない人。父兄や子供たちに呼びかけて地域探検をする「エコクラブ」活動を実施しており、敏音知小学校の「ピンネの広場」学習にも何かと指導をお願いしている。

「町の自然に親しみ交流の場にしたいとエコクラブをつくり、月1回平均で活動をしています。10名から20名は参加するようになり、ホタルの里づくりも軌道に乗ってきました。ここにはホタルがいないと思っていたのですが、林の中でヘイケボタルが飛んでいるのを発見したんです。森や川を守りながら子供たちの観察の場にした」と生息を調査しています。

今の子供たちは釣りやカヌーに親しむ機会が減ってきていて、川遊びも非日常的になってきています。生活の中で川へ行く、野山で遊ぶという習慣を身につけてもらいたいの、小学校の総合的学習にもできるだけ協力したいと思っています」と田辺さんは語る。日本野鳥の会会員で、地域の自然を愛する

全児童9名の小規模校、敏音知小学校では、豊かな大自然と先生、地域が一体となった教育環境の中で、「ピンネの広場」と名付けた総合的な学習に取り組んでいる。カヌー教室、登山、スキー等の地域探検・エコクラブ活動から、オオクワガタ飼育や地域に全戸配布する木版画づくりなど年間を通じて体験学習がいつばい。

また同校は、全道僻地複式教育の研究大会開催地になっており、毎年8月末から9月にかけて、北海道の大学生が10数名教育実習に訪れる。パソコン教室他各種授業、遊び、酪農体験等を通して子供と青年たちが交流する楽しい一週間である。

学校で羽化、成長したオオクワガタ



ネーチャールリスト。高校生の娘さんのお父さんで、青少年に夢と活動の場を与える町づくりに取り組んでいる。

さて、学校では6月末に6年生の3校の児童と一緒に札幌方面へ修学旅行。都市から田舎へいくとは逆に、北海道開拓の村や科学館等を見学したあと、夜はテレビ塔からの夜景を楽しんだ。

### オオクワガタが次々と羽化

5、6年生（3人）の自主学習では昨年からカブトムシやオオクワガタの飼育に挑戦している。

オオクワガタは昆虫に詳しい町内の酪農家・森川良治さんから幼虫と成虫をもらい、カブトムシは地域の山林で幼虫を捕獲し、腐葉土を入れた瓶を教室に50個ほど並べて観察してきた。子供たちは酪農家へ飼育法を聞きに行ったりカメラでサナギを撮影するなど熱心に観察を続け、サナギが真っ白い胴体で成虫に羽化する時は全児童が見守った。5年生が飼育しているニホンザリガニにも赤ちゃんが生まれており、槽隆志教頭は「これらの飼



敏音知岳登山。704mの山頂にて

育を通じて子供たちに自ら学ぶ意欲や自信が出てきました」と評価している。

カブトムシ等の飼育では、森川さんの指導でこの菌を加え、またザリガニの飼育では餌をすりつぶして与えたり、森林センターで木の切り株を提供してもらったりなど、子供たちは地域の大人に協力してもらいながら、生命の神秘や感動をいっぱい学んでいるようだ。

11月末から12月にかけては、一年間の思い出を版画にして、地域の住民に配る「版画カレンダー」の制作に全児童が頑張る。もう18年になる敏音知小学校の伝統的学習の一つで、地域の人達からも「楽しみにしていたよ」と喜ばれている。

『子らの四季』というタイトルの月めくりで、初版は昭和61年で、以来欠かさず制作されてきました。細部まで工夫した版画で専門家も評価しています。児童と先生方の努力を凝縮した作品で、これからも継続していきたい



北海道教育大学の教育実習生を迎えて、版画作り、お別れ会。  
(写真提供 / 敏音知小学校)

いと切望しています」と安田校長は言つ。

**教育実習生との交流**

敏音知小学校は全道僻地複式教育の研修・研究大会の会場として約70名の参加者が授業公開に訪れる（平成13年度）ほか、毎年8月から9月にかけて、北海道教育大学岩見沢校の教育実習生を受け入れている。

実習生はピンネシリオートキャンプ場のコテージに宿泊、自炊しながら複式学級の授業参観、酪農体験、地域の行事や子供会活動に参加する。子供と学生の酪農体験実習は、実習生の真摯な取り組みに子供たちは多くのことを学び、学生たちも地域や学校を挙げての協力で、地域に根ざした教育のあり方を実感することができるようだ。これらの教育実習生の中から、未来の優れた僻地教師が誕生するだろうと、先生たちは期待している。

# 夏休み1 カ月田舎体験



NPO法人 国際自然大学校  
代表 佐藤初雄

## ★ウクウク・ドキドキ体験

ワァー、キヤー、ヒェー、エーッ、見て見て、ウソー、ホント二ー、どうしよう、マイツタナー、アツイヨー、もう疲れた、絶対イヤだよ、死にそう、子ども達の声だ。

今夏、5回目の3泊31日（1カ月間）の長期自然体験のキャンプである。国際自然大学校の山梨県北巨摩郡長坂町にある日野春校で実施されている。夏休み40日間のうち、31日間も利用して、小学校4年生から中学2年生までの男女が、親元から離れて、たった一人で見ず知らずの子ども達や大人達（スタッフ）と一緒に生活をするなんて信じられないとの声が聞こえてきそうだが、実際に行なわれていることである。

1カ月間、一体、子ども達は、どんなことをして過ごさのだろうか。暇をもてあそんでしまつて、子ども達は飽きないのだろうかと思議に思つかもしれない。しかし、子ども達は、本当に嬉々として過ごしている。冒頭に述べた奇声や一言はまさに生きた証言である。時には、腹をかかえてころげまわる子どもや、涙を流して笑い続ける子ども。そしてある時は、辛く、哀しいこと、腹立たしいこと、喜怒哀楽の全ての情感を体験できるのが1カ月キャンプである。キャンプといっても、テントで生活し、飯盒でご飯をたき、食べるという生活ではない。主に生活をするところは、八ヶ岳南麓に位置し、標高600mほどの田園風景の残る里山地域である。一見、民家風の2階建ての「志生館」で生活をする。もちろん、電気、水道、ガス、電話等、普通に生活するのに困らない設備は全て完備されている。しかし、テレビやゲーム機は置いていない。

彼等の生活は朝6時30分には起床し、毎朝、農作業をし、じやがいも、きゅうり、なす、

ピーマン等の収穫をしてくる。また、別のグループは、ヤギ、ニワトリの世話をしながら、卵を拾い集めてくる。こうした新鮮野菜を利用し、食事を作る。もちろんこれだけでは足りないで、近くの農家の人にも協力してもらい、新鮮野菜を譲ってもらっている。米は、農家の協力を得ながら、毎年、田植え、稲刈りのプログラムで作られたものを使っている。中には、これらのプログラムに参加した子どももいる。ご飯は、大きな力マで薪を使って炊く。力マの底にはちよっぴりおこげ。おこげをねらつてご飯を食べる子どももいる。ちよっぴり油をたらして食べる。「これがおいしいんだな、本当に」。その後は、皆で、食器を片付け、食器洗いと掃除を分担してこなす。これで朝の仕事は終了だ。

## ★豊かな自然と農村地域が おりなすプログラム

さて、プログラムだが、日野春校には宿泊研修棟が2棟の他に、キャンプ場や、プロジエクト・アドベンチャー（P・A）と呼ばれる施設を含め、約1万坪ほどの敷地があり、雑木林や赤松林がある。これらの林の手入れのために、間伐を行ない、その間伐材で敷地内に流れる小川に橋をかけるといった、一大イベントもやっている。こうした作業のついでに、つつい夢中になり、やめられなくなつてしまつのが川遊び。なんといっても夏はこれにかぎる。この他にも南アルプスから流れ出る清流にも川遊びに出かける。子ども達が最も好きなプログラムのうちのひとつである。沢のぼり、釣り、滝つぼに飛び込み、チューブで川下り等々。子ども達が本当に嬉々として遊んでいる姿を見て、我々、大人であるスタッフもホッとする瞬間だ。

無我夢中で遊んだ後のお楽しみは、おやつ

である。もちろん、基本的にはあまり既製品を使わずに、手作りのおやつを出すようにしている。くわの実の手作りジャムの入った手作りクッキー。大麦を近くの農家から譲り受けて焙煎した手作り麦茶を冷やして飲ませている。

そして再びプログラムでは、藍染めで自分が着るTシャツ作りやハンカチになるようバングナ作りをする。できあがったものは1カ月間使用し、そして思い出の品ともなるものだ。もちろん、テントで生活をしたり、マウンテンバイクでの長坂町1周プログラム。標高3000mにも達する八ヶ岳3泊4日の縦走登山といったプログラムもある。

しかし、子ども達が一番の人気プログラムは、民泊と地域で行なわれる祭に参加することだ。地域の農家に協力してもらい、子ども達2〜3名を1泊2日、ホームステイさせてもらうもので、今までは一味違った地元の食事やおやつに大喜び。でも、楽しいことばかりではなく、必ず農作業のお手伝いもある。中にはヘトヘトになる子どももいるが、なんとかこなしているようだ。夜はおじいさんやおばあさんの話をいろいろと聞かせてもらい、その地域の歴史や文化といったものを直接教えてもらう。自分達の親の話とは違い、なかなか興味関心の湧くものらしく、評判である。

と、こんな感じの30泊31日が長期自然体験活動である。



佐藤初雄代表



30泊31日の長期自然体験キャンプに参加している元気、元気な子ども達。

## ★連携と指導者養成

こんな長期自然体験活動が生まれたきっかけについて少し話をしてみたい。実はこの事業が始まったのは1998年、文部省の「子どもの『心の教育』全国アクションプラン」という委嘱事業として行なわれた。そのきっかけは1997年の中央教育審議会の「幼児期からの心の教育のあり方につ



自主企画の作戦を練る



マウンテンバイクで長坂町を一周し、ゴール！

いて」という小委員会で、私は「民間の自然体験の現状と課題」というテーマで発表する機会があった。その審議の中で、欧米のような1カ月にわたる長期自然体験活動の提案がされ、1998年6月30日の答申の中に「民間の力を生かし長期の自然体験プログラムを提供しよう」という一文が盛り込まれたことによるものであった。その後、1999年より、文部省委嘱事業として、全国50箇所で開催され、2001年度には全国84箇所で開催されるようになった。

### NPO国際自然大学校

〒201-0004 東京都狛江市岩戸北4-17-11 TEL 03-3489-6582 FAX03-3489-6921  
E-mail n\_aizawa@nots.gr.jp ホームページ <http://www.nots.gr.jp>

この状況をもう一度見てみると、当時、15年間、民間で子ども達に自然体験を提供することを事業として行なっている国際自然大学校の実績と行政支援（経済的支援）と、地元の人々により、この事業が誕生したことになる。つまり、民間団体だけでも、行政だけでも、そして地元の人々だけでもこの事業は生まれなかつたわけである。

また、子どもにとってこのような長期自然体験が、当時「心の教育」として、現在は「生きる力」を育むために必要であると判断されたわけである。つまり、現代の子ども達に欠けている対人関係スキル、自然への感性、自己判断力、自己成長、リーダーシップ等を育成させる場として自然体験活動が求められているのである。

これからの21世紀は、環境問題は人類にとって最大のテーマになる。その中でも、私は「自然と共生するライフスタイルの確立」ということが最も重要であると思う。この自然体験活動はこのテーマを子ども達に直接的に伝えることのできるもっともすばらしい機会のひとつである。

しかし、この自然体験活動が子ども達にとってすばらしい機会となるか否かはよい施設、よいプログラム、そしてよい指導者がそろっているかが重要なポイントとなる。

特に大切なことは、指導者の資質により、その成果が左右されることだ。今、求められていることは、質の高い指導者をいかに養成し確保できるかである。こつした基盤整備のためにも、農村地域の人々、専門家集団としての私たち、そして行政との連携が不可欠である。

残念ながら、自然体験活動自体、まだまだ脆弱な状況なのだ。



ブナやナラの豊かな森や屋敷林、手入れのよい棚田群、雪国の風情を伝える民家と伝統的農産物等、越後東頸城地方には自然と共に生きてきた人々の暮らしと文化がある。忘れかけていた日本の原風景の里。この自然や文化、山間部で農耕を営々と続けてきた越後農民の姿を、次の世代に大切に伝えていきたいと、6町村による「日本の田舎体験」交流事業が平成10年に始まった。地域の特色をいかした各施設では都市の子供たち、親子連れ等が宿泊や体験学習を楽しんでいる。そこには村おこしや交流事業に情熱と夢を持って取り組む施設の方々や魅力的な農民がいる。駆け足で主な施設を「紹介」。



# 田舎の原風景を舞台に感動と発見を 越後で田舎体験 (新潟県東頸城地区)

6町村、26民間施設で  
広域体験型観光を

新潟県東頸城郡は長野県境と接する山間部で、冬の積雪は3mに達し、また交通が不便だったことから、ブナの原生林に代表される豊かな自然、独特の農村文化、棚田や茅葺き民家が残っている地域である。人口は6町村で2万850人と小規模行政区でもある。平成8年東頸城広域観光計画「わんぱくこそう村構想」を策定、その具体的施策として10年に6町村(安塚町、蒲川原村、大島村、松代町、松之山町、牧村)と26の民間施設により「越後田舎体験推進協議会」が設立され、体験型広域観光事業に取り組みはじめた。

この体験事業には、ブナ林の散策等の自然体験、バードウォッチング、ホテル観察等の環境学習、田植え・稲刈り、そば打ち等の農業や食文化体験、わら・あけび・蔓細工等の伝統工芸、川遊び・スキー等のスポーツ体験など70を超えるプログラムが用意されている。小中・高校等の利用者は11年度が10団体約1000人、13年度が23団体2520人と順調に伸びており、宿泊・体験による売上のほか、物産や飲食等にも大きな経済効果を上げている。

窓口(安塚町/雪だるま財団内)の

一本化とシステム化に加えて、人材やインストラクターの養成、行政と民間施設間の交流など、6町村が協力しあつて、ありのままの地域資源を提供していることが好評を博しているようだ。

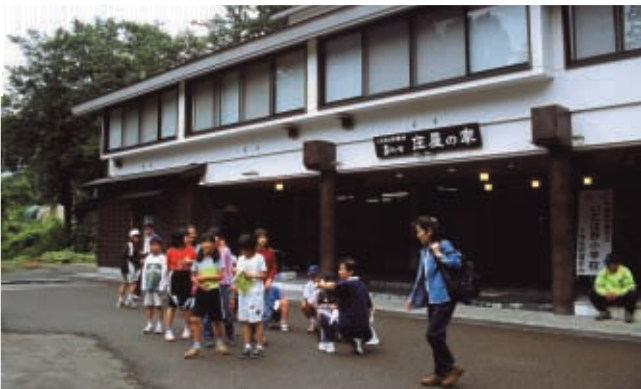
## ニータウンの小学生が体験交流 大島村「庄屋の家」

6町村のほぼ中央に位置し南北に長い大島村。その北部に「ふるさと体験村・あさひの里」がある。かつてこの地域を治めていたという庄屋の家屋敷を村が借受け、民家を復元した体験棟と50・60名が宿泊できる宿泊棟を設置、「庄屋の家」体験施設として関東

各地の小中学校が活用している。

我々が取材に出かけた日は、千葉ニータウンの中にあるいには野小学校5年生18名が来館していた。千葉ニータウンは東京へ通勤する人たちの住宅地として20年ほど前に開設された街で、いには野小学校は未来型の最新学園として3年前に開設された。大島村が同校の体験学習を受け入れるに当たっては、庄屋の家の管理人・武田正勇さん、役員企画振興課本山人さんらが学校へ見学に出かけるなど、事前の交流も積み重ねた。

朝7時に集合して上越新幹線、ほくほく線(北越急行)に乗ってきた子供たちは昼頃には庄屋の家に到着した。



いには野小学校の子供たちを迎えて。上/宿泊棟 中/体験棟

◀あさひの里・入口に立つ看板





上 / 庄屋の家管理人・武田さん 下 / 役場企画振興課・本山さん



「電車が楽しかった」「ここでの昼食が美味しかった」と元気いっぱいの子供たちは、午後からそれぞれの希望に併せて体験学習。男の子たちは釣りに希望者が多く、お気に入りの竿を持ち役場の本山さん等が案内してバスで出発した。体験棟では女子が中心に、あけび蔓細工とひょうたんの置物づくり。指導するのは「あさひの里・名人」たち。地域のお年寄りや主婦が、この地方の伝統工芸、物産などを指導者として勉強しなおした。現在わら細工、炭焼き、書道、そば打ち、山菜取り、昆虫観察、竹細工、蜂取り、村の鍛冶屋等約20の講座があり、村の名人が材料の手配を込みで指導に当たっている。

この日、あけび蔓細工を指導するのは武田十九子さん。山を歩いてあけびを採集するのが大変で、取った木は日陰干しなどの管理が大切。子供が編みやすい手頃の太さの癖のないものを用意して、見本の籠を示しながら指導していく。最初の組み方をマスターすると後は子供でも編め、次第に形のよい籠が出来上がっていく。男子でただ一人参加した少年は「母さんに最高のプレゼントができた」と大喜びだった。

ひょうたんに絵を描いて装飾品として仕上げる学習を教えるのは小山徳一郎さん(81)。「昔は大きなひょうたんを作って青空市場に出していたけど、形のいいのを栽培するのはなかなか難しい。これはかなりひょうたんといつて、今は私くらいしか作っていない。完熟したひょうたんの中の実をきれいに取り出して乾燥させるのだけれど、蔓を残しながら仕上げるのは大変で、半分はダメになってしまっんです」と小山さん。子供たちはこの瓢箪を2、3個ずつもらって自由に絵付けしていく。少女たちは絵が上手で、中でも全体を雪だるまにして大胆に目や口を描いた作品は斬新で「雪だるまひょうたんとして商品化すれば人気になるかもしれないね」と、見学する館の関係者も感心していた。

「子供たちに会えるこの体験学習は私の生きがいです」と小山さんはお土産にと無地の瓢箪を子供たちにプレゼントした。体験館で作品を作り終えたあけび蔓細工班は、武田さんの案内で庄屋の家の森へあけびのつるを探しに出かけた。手入れされた森には樹齢数百年の天然檜やミズナラ、ブナ等が茂り、山野草も豊富。「ここは雪が4mも積もるの、でもそれが植物にはとてもよく、美味しいお米や野菜が取れるんですよ」と散歩しながら武田さんは子供たちに話す。あけびの木も幾つか見



▶ひょうたん絵付け教室。指導する小山さんと女子たち。完成品をもつて。あけび蔓細工を指導する武田さんと子供たち。

つかり、楽しい散策だった。釣りの方はあまり成果はなかったらしく、竹本隆一先生は「川には沢山いるのに、君たちがあんなに大声で喋ったりはしゃいだから魚は逃げてしまっただんだよ」と言っていた。

夕食のあと、役場の本山さんのガイドでホタルを見に行くことになった。小雨はふっているが源氏ボタルの乱舞が見られるということで、8時に館のバスで出発。ホタルの里では地域の世話人たちが待っていてくれて、ヤゴ(幼虫)を見て説明を聞いたあとと林へ案内してくれた。真つ暗闇のなかでホタルが光り飛ぶ姿を見て、子供たちは今度は小さい声で歓声を上げる。私は夜おそくまで村をあげて対応する人々の姿に心打たれた。

地域の農家へホームステイ

いには野小学校の体験学習教室では、翌日は2、3人ずつであさひの里



の農家へ行って一泊するホームステイを組み込んでいる。「子供たちにとって農家へ泊まりに行くことがとても楽しみです。お客様ではなく手伝いという趣旨ですが、子供たちは家族の人たちのやさしさや農家の暮らしにいろいろ学び感動を受けたと感想を書きます」と佐藤耕一校長は言う。

このホームステイは11軒の家に午後3時頃行き、畑や田など見て学び、一泊して庄屋の家に朝8時半頃戻ってくるというもの。受入れ農家の一つ、布施正栄さんの家を一足早く訪ねてみた。布施さんは高原野菜を主体にした藤尾生産組合のリーダーで、無農薬トマトを栽培中。

「勤め人や大工はいつも同じような仕事しているけれど、農家は苗を植えたてり育てて摘んだり、田んぼへ出たりといろいろな仕事があり、一生懸命やれば美味しいものが出来る楽しい仕事ですよと言います。子供たちにもトマト



上/都市の子供たちのホームステイに意欲を持つ布施正栄さん親子  
下/グリーンハウス里美の田中さん(右)と研修生後藤さん。右は宿泊研修施設



の苗を植えてもらい、トマトの成育を知らせたり品物を送ってあげます。夕食は農家の野菜を使って子供たちにも手伝ってもらったりなど、客扱いにせず一日うちの子供になったつもりで接する。最初は取っつきにくかったりするけれど、すぐ慣れて、翌朝は別れるのがつらいほどです」

受入れ農家で若い人がいる家は布施さんを含めて4軒。子供の賑やかな声が聞きたいとこの日を待っている中高年世帯の農家も多いようだ。

「生徒にはポケッとのおんぴりさせてやりたいね」  
松之山町グリーンハウス里美

越後を代表する温泉地で知られる松之山町の北西部・浦田地区は、洩海川の周辺に広がる肥沃で平坦な水田地帯。なみなみと水を湛える美田の一角

に3階建のグリーンハウス里美があった。2階のリビング・食堂から望む水田は大半がここのご主人、田中さんの耕作地。新潟県の行方グリーンツーリズム推進のための宿泊施設整備助成事業が初めて適用された施設で、農業体験民宿として毎年横浜市、武蔵野市などの中学生を受け入れている。

田んぼの脇でパワーシヨベルを動かしている田中富士雄さんを訪ねた。「俺、この町に残ったたった一人の専業農家さ。町で一番、5町歩の田んぼをつくっている。ここは棚田の多いこの地方の中では平地で、川あり森ありのいい環境だよ。子供たちの体験学習としては横浜市と武蔵野市の中学生が田植えや稲刈り等にきているが、正直言うと、中学生ではもう手遅れという感じがする。確かに農業体験も真面目によくやるのだけれど、カリキュラムに従ってやります、という感じ。その

「頭では農業のことをよく勉強しているのだけれど、実際に現場で学習していないので、いましこいてるんですよ。日本の恥になっては困るからね。やっと一人前に動けるようになったね」と田中さん。10月頃まで里美に居候する予定とか。

里美では、田中さん夫妻の他3人の農家が体験農業に協力し、田植え、稲刈り、山菜取り、わら細工作り、雪下ろし体験等を行っている。農作業や自然と親しむ仲間の輪を広げたいと田中さんは願っており、新規就農者の研修も受け入れている。そのため料理名人のいずみ夫人の協力に加えて、長期滞在者のための自炊施設も用意している。

グリーンハウス里美  
☎02559(6)3492

お年寄りの交流・憩いの場にも  
牧村マウンテンリバー川上笑学館  
かつて子供たちでにぎわった学校は

点、小学校5、6年生だとまだ感性が豊かで、受け入れる側も楽しくてやりがいがあるね。生徒達は多忙、山へでも入ってポケッとのおんぴりさせてやりたいと思う子もいます」

田中さんの家には4月から元JICA専門家の後藤明夫さんが研修にきている。

「アフリカのタンザニアやコートジボワールで水田の指導をする目的で、田中さんの下で半年かけてしっかり農業技術と農民の心を学びたいと思っています」と言う。

「ここは平田は、山の龍宮城」になり、周辺のお年寄りが宿泊にきたり、地域の人が何かといっちは集まってくる場所なんです」と小林さん。

牧村には6つの小学校があったが、少子化に伴い児童数が減ったため、村は一年おきに学校を統合していった。最後にここ川上小学校を閉じた時、住民が集まる場所が欲しいと体育館をそのまま残し、住民が管理運営することを条件に村が1億円かけて宿泊交流施設を建設してくれた。地域の青年会活動のリーダーだった小林さんが世話人を引き受けることになり、7年目になる。

開設以来食事の世話をしてきたのが金井輝子さん。「ここへくる常連客のお年寄り達は独り暮らしか家族がいても仕事もなく暇で寂しいという人が多く、皆人に会ってお喋りしながらのおんぴりしたいと利用してくれるんです。お米を送ってくれたり野菜を届けたりと、とてもやさしい人達です」と金井さんが言うと、食堂に下りてきた婦人達は、

「笑学館は自分の家に帰ってきたよう



な気持ちになれるんです。小林さんはいつも人を笑わせる漫才師みたいな人だし、金井さんは料理上手で娘のようにここへきたら布団も敷きっぱなしで風呂に入りお喋りして過ごすんです」と口々に語った。

越後田舎体験推進協議会ができて、子供たちのそば打ち体験教室、自然教室等の機会が増え、大学生の合宿も。古い体育館は体験教室に恰好の場所になり、2階には畳30畳ほどの和室もあるので合宿する学生に人気がある。し

かし最も活用するのは地元出身の人達や地域の人達で、何かとってはここに集まる。そんな中で、日本一美味しいコシヒカリ米をつくるための話し合いや郷土料理の開発、昔の遊びの復活などのアイデアが生まれる。

それを吸収してまとめあげ、体験学習や交流事業として進展させていきたいと小林さんは思っている。

「越後田舎体験」が設立したとき、教える人(リーダー) ネットワーク作りの初代会長を勤めた小林さんは、「各地のリーダーややる気のある農民たちと知り合ったことが大きな財産になっていきます。いずれ合併で東頸城郡という言い方が消えてしまいかもしれないけれど、この地域の人のネットワークだけはこれからも大切に生かしていきたいと願っています」と語っていた。

川上笑学館 ☎ 0255(33) 5079

越後の食品おこしや体験学習の発信地として  
安塚町カルチャーセンター 田舎屋  
自然王国ほその村

大島村から山道を越えて安塚町へ入ると、自然王国ほその村の看板があり、体験宿泊施設・六夜山荘、工房ほその村などの施設が建ちならんでいる。山荘は夏休みに備えて改装中、工房へ顔を出すと、お母さんたちが笹団子を作っていた。地元で採れた笹は濃緑が美しく、そこに地元産の小豆、米粉で作った団子を入れて上手に包む。他にも漬物、味噌、山菜等の加工品を作

り、これらは町の中央部にある「雪だるま物産館」で売られ、笹団子は物産館の人気商品になっている。蓬と笹のかおりあふれる美味しい伝統和菓子だ。

別名フラワーロードと呼ばれる国道403号の入口に役場と「雪のまぢみらい館」があり、その2階に言だるま財団と越後田舎体験推進協議会の事務局があった。ここですべての体験学習や研修、旅行等を受付けている。5、6月は子供たちの体験学習、7月は夏休みの林間学校の申込等で事務局は大いそがし。

「個人やそれに近い主婦などの旅行は、要望に応じて民宿を紹介し、学校関係など団体の問い合わせや申込は協議会が対応しています。学校関係では宿泊して体験する人だけで年間3000人を超えています。原則として、申込をこの事務局が受けていることで、手配、連絡、精算がスムーズ

であり、人・会場とも有効に活用できます。また官民一体となって広域的に地域おこししていくという気運が高まっています」と事務局の小林美佐子さんは言う。広報活動にも力を入れており、パンフレットや新聞などいろいろ用意されていた。

続いて訪ねたのが「カルチャーセンター田舎屋」。山深い沼木地区

体験宿泊施設・「六夜山荘」「田舎屋」を案内してくれた竹内征雄支配人



(戸数40戸)の元学校を全面的に改築した、モダンでお洒落な施設。地区の人がもてなしてそば、味噌、山菜等の体験学習や田舎料理を提供するほか、体育館はダンスホールにもなる。檜の風呂、木の香りのする宿泊室、会議室等、よく整備され、また写真愛好者たちの拠点にもなっているため、棚田等を撮影しに来る人達用の現像場(暗室)も設置されていた。名物蕎麦は天然の山芋つなぎを使って伝統的な手打ちで作った「朴ノ木そば」として知られ、年間5000人が訪れている。  
田舎屋 ☎ 02559(2) 2300  
越後田舎体験事務局  
☎ 02559(2) 3988  
Email: taiken@yukidaruma.or.jp

文/浅井登美子 カメラ/小林恵

◀笹団子を作る「ほその村」のお母さんたち

▶オーナーと地元の人で棚田の田植え  
▼田んぼに入る前に手順の説明を聞く



# 濃密な「山里のやすらぎ」交流 矢部町菅地区オーナー田 (熊本県)

阿蘇の外輪山と九州山地の裾野に囲まれた典型的な中山間地に位置する熊本県益城郡矢部町。中でも「陸の孤島」と言われた92世帯の菅地区は、矢部町を南北に断ち切って流れる緑川渓谷によって、町の中心部から隔てられていた。その緑川に、3年前「鮎の瀬大橋」が開通したことで、菅地域は活力のある地域に変貌しようとしている。

耕作をやめて放置されていた棚田を、都市の住民に貸し出す「オーナー田」の試みは7年目を迎えた。都市に暮らすオーナーの子供たちは、菅地区を自分の故郷のように親しみ、愛情を深めている。

梅雨前の日曜日、オーナー田の家族が集まって、賑やかに田植えが行われた。

菅地区には個性豊かな農民がいて、米は日本一美味い

午前9時。すでに陽射しは肌を刺すように強い。オーナー田の家族が集まっているのを確かめて、菅地区選出の町会議員梅田幸雄さん(53)が挨拶に立った。彼は、オーナー田を始めた7年前、菅地域振興会の事務局長であった。「3年前から味の良いヒノヒカリという品種に変えています。今年は茎が太くて良い苗です。昔から、苗半作とい

ますので、今年も豊作になることと思います」

続いて、熊本県から約1時間半かけてやって来たオーナー側の会長堀良輝さん(62)が挨拶。

「7年目を迎えて、初志を忘れていたような気もします。新しいオーナーが加わってくれることは歓迎ですが、古くからのオーナーと断絶があるように感じています。菅地区地元の方々と交流する目的を忘れず、米作りに頑張りましょう」

のっけから少々厳しい挨拶である。集まっているのはオーナー11家族、地元から約20人。

上菅地区の小さな谷間に、勾玉の形をした棚田の水面が青空を映して光っている。菅地域振興会で3日前に代播きを済ませておいたのだ。手植えの人、地元の田植え機を頼む人、田植えはオーナーの考えで決める。

堀会長の家族が、田植え機に任せたとオーナー家族の応援も得て、満々と水を張った田んぼに足を踏み入れる。「今日は、うちは新しく婿さんも連れて来たけん、赤かシャツを着ると。農業も後継者を作っとかないかんけん」

堀夫人が、農家気取りのジョークを交えて、新しい家族をオーナーの仲間を紹介する。ここでも近所付き合いは大切なのだ。



堀良輝オーナー会長

1アール(一畝)の年会費が、3万5千円。月一回は農作業に来ることが条件だ。収穫した米は、全て玄米としてオーナーに届けられる。「特定農地貸付け法」を利用して、矢部町が地主から田んぼを一旦借りて、それをオーナーに2年契約で貸し出している。地元の発案で地元独自の取り組みではあるが、農地の貸借契約の業務だけを町役場で行っている。

会費として入ってくる小作料3万5千円のうち、5千円は離村している地主へ、1万円が管理人、つまり菅地域振興会へ、2万円は共通経費に消える。地元で経済的なメリットはほとんどないのだから。町役場の窓口となっていて、農林課農地係の西田毅係長(51)は、オーナー田の意義を次のように説明する。



上の田んぼでは、吉本鹿文くん（小5）、花弥さん（小3）、美瑠喜さん（小2）の兄妹が、泥んこになって田植えに奮闘していた。最初からのオーナーで7回目の田植えを終えた母親の吉本ひろみさん（40）が、脇を流れ

「もよおして仕事をしよーい」  
活発に意見交換

「家庭用の小型精米機を昨年買ったですもんね。5合精米のできるやつ。米を研ぐ直前に精米してから、30分が1時間置いて炊くとです。そげんするとです。新潟の米と負けん味になるとです。最初は面倒くさかばつてん。慣れてしまえばそげんことないですわ」

「自分たちの子どもは帰って来ていないのに、外から若い人、子連れが来てくれる。地域の人はうれしーいんですよ。地域が自信をつける役割を果たしている」  
65歳以上の人口が45%を超える地域だ。経済的にメリットがなくても、「この風景の中にいるとほっとする」「この米が一番つまい」「地元の農家が私たちの先生」などと、これまで自分たちが守ってきた風景や農業技術をほめられると「元気が出るのも当然だわ」。  
「そぎゃん植えとくなら、7月の下旬になったら、下は腐ってしまっ」  
地元農家の小里忠士さん（73）が、田植えに夢中の堀さん一家に、大きな声で話しかける。植える苗の本数が多

いと根腐れすると、注意してくれているのだ。  
下の田んぼで子どもたちの声が聞こえる。

「ぬるっとして、気持ち悪い。あ、カエル。青ガエルだ。2匹いる。イボだ」「さくら農園」と小さな標柱のある田んぼで、中村さくらさん（小6）と寺本和泉さん（小2）の二人が補植の手伝いだ。オーナーになって3年目の中村寿伸さん（44）は、米を作ることが目的ではないと言っ。

「ここに来ることが第一の目的です。熊本市内の農家で、ただで田んぼを貸してやると言うけど、それじゃだめなんです。ここの人たちは、一人ひとりの個性がユニークですな」  
地域の人々と交流することが目的と言っのだが、そればかりではなさそう。菅地域の米の美味しさを語る時、目の輝きが違っていた。



▲裸足で苗運び、吉本花弥さん  
▼川魚獲りや川遊びが大好き、吉本鹿文君

る小川に浸かって苗箱を洗っている。「最初に来た時、私は下の子が生まれただばかりで、お父さん勝手に行ってという感じだったのですが、無理矢理引っ張られて来て楽しかったですね。田植えなんて初めてだったし」  
母親の頭上に架かる丸太の橋を渡って、田植えを終えた3兄妹は、裸足であぜ道を走り下って行った。  
菅順一郎さん（49）も、子どもをとを考えて7年前オーナーになった一人だ。  
「子どもを裸足にさせたくて、ここに連れて来ていたのですが。下の子が中1になって、今は、母ちゃんと二人だけで。畦に座って話す内容が、家で話すのとちよっと違うかなというのはありますね」  
オーナー田の谷を流れる緑川の支流から、吉本3兄妹の歓声が聞こえてき



▶中村さくらさん（左） 寺本和泉さん



た。鹿文くんが、窪みに溜った川水に、服を着たまま気持ち良さそうに浸かっている。  
6月の田植えに始まって11月初旬の収穫祭まで、毎月1、2回、草刈り作業にやってくるうちに、吉本家の子どもたちにとって菅地域は、熟知した自らの故郷と同じくらい親しみのある土



地になっていた。

昨夜から、ベットポトルで魚を捕る仕掛けを作って準備し、着いてすぐに川底に仕掛けておいたそう。鹿文くんは捕まえた小さな川魚の入ったベットポトルを得意げに見せてくれた。次には、花弥さんが「見て、見て」と、大きなオタマジャクシを一匹、両手で慈しむように包んで見せにきた。

昼前に、田植えは全て終わった。続いて、公民館で婦人会心づくしの昼食である。とっておきの手打ちソバや肉ジャカを御馳走になった後、梅田町議が声を上げた。

「目標を見失っているのではないか」という意見もありました。オーナー田の発展、地域の活性化のためにも反省会ということ、意見交換の場を持ちましょう」

オーナー側から、自分たちの反省も含めて活発な意見が次々と出てくる。「田植えも草刈りも来んどって、米だけをもらう人も居られる。それじゃいかんぞ」

「7年も来とって、田植機もうまいと扱いきらんじゃいかん。もっと古株がレベルアップをしとかな」

「毎月来とつとに、草刈りの仕方も知らん。今年で2年目、私は、昨年は24回来ました。自力で米を作りたい。米作りの基本の基を教えたい」

オーナー側の熱意ある要求に、菅地域振興会は、都会の人が遊びや自然と親しむだけで来ているのではないかと、改めて気持ちを引き締めたようだ。お互いのパイプを太くして情報の通りを良くすること。オーナーに遠慮することなく技術指導をびしびししていくこと。そして、最後には「もよつて（結いで）仕事をしよい（しましよ）」と、確認をして散会した。

オーナー側の事務局を担当している寺本裕二郎さん（52）も、初年度からのオーナーである。

「元祖オーナー田のプライドがあるじゃないですか。地域の人は一人か二人しか出て来られんけど、立派にやりよつどという風に言われたい訳ですよ」窓から入る初夏の風に乗って、大人たちの話し合いに飽きた子どもたちの遊ぶ声が、遠く聞こえてきた。

「皆で協力すればできる」  
菅地域振興会の努力と自信

町役場から南へ、緑一色の山々を縫うように農免道路「アグリロード 鮎の瀬」を車で行くと、突如目の前に水面からの高さ140mの「鮎の瀬大橋」が飛び込んでくる。橋の中央にある一本の支柱から逆扇型に広がる赤く太いワイヤーが、力強く美しい。

「菅地域の悲願でした」と、梅田幸雄さん。

昭和30年代、車が普及していなかつ

た時代には、菅地区から役場へ行くのに、緑川渓谷を下り対岸を上り、2時間半もかかった。陸の孤島と言われる所以である。そこで、地元では昭和47年に「菅地域振興会」を全戸加入で発足させ、地域住民一丸となって交通環境改善に取り組んだのである。その努力は、昭和56年に農免道路整備に着工、平成5年には鮎の瀬大橋の着工と実を結んだ。菅地区92世帯のために70億円もの投資である。

しかし、いよいよ悲願がかなうことになって地域住民から、橋が架かることによる不安の声が聞こえ始めた。

「地域の繋がりが薄れるのではないか」というのだ。振興会では、それまで八一面の充実を悲願として活動してきたのに、新たなソフト面の課題が浮上したのである。

それ以前から、「このままで良いのか」という漠然とした不安は地域にあった。「長男会」を組織し、地域のことを知ろうじやないかと、地域の歴史を調べ、神社仏閣を調べ、聞き取り調査をし、報告書も出した。17年前からは毎年11月に「ふるさと祭り」を開催し、地域の結束を図っている。しかし、何よりも地域が団結したのは「日本一のしめ縄」作りだったと、菅地域振興会の緒方肇会長（66）は言う。

「あれが手始めですね。皆が協力すればできるんだと、自信に繋がりました。住民自治の確立というですかね。自分たちでできることを自分たちでやりたい。行政からの脱却が特徴ですから」延べ600人が参加して、胴回り6m20cm、長さ80mもあるしめ縄を作り、



▲夫婦岩に架かる日本一のしめ縄  
▶菅地区の悲願だった鮎の瀬大橋

地元の名所夫婦岩の高さ50mの所に架けた。しめ縄作りの音頭をとったのは、「長男会」を引き継いだ「地域づくり実行委員会」である。これに自信を得て、オーナー田を企画した「菅地域振興会」へと発展した。

親に連れられて来た子ども達は、「オーナー田」の作業で、土の感触や草の臭い、掌で動くカエルやバッタの生命、小川で捕まえた小さな魚の美しさを体験することになった。これらの全てが、菅地域の人々と風景に混ざりあって、子どもたちの故郷の記憶となる。この体験は、彼等の一生を支えるのであろう。

都市の子供たちの新鮮田舎体験

# 小さな入り江で始まった、海のグリーンツーリズム 松崎町岩地漁港「体験修学旅行」(静岡県西伊豆)



台風前の時化した海辺でビーチバレーなどを楽しむ中学生たち。

夏には毎年大勢の海水浴客で賑わう西伊豆松崎町。海、山、温泉と恵まれた地形を活かして、宿泊施設も多く、民宿だけでもその数は158軒にのぼる。しかし景気の低迷ゆえかシーズンの終わった浜に人影は少ない。そんな中、住民の約6割が観光産業に携わっている松崎町岩地地区を取り組んだのが、通年誘客への期待を込めた海のグリーンツーリズムだった。

## 波穏やかなこの浜を活かそう

クルマが松崎の町を抜け、ウバメガシの山道を下って行くと、眼下に白い小さな入江が見えてきた。真っ青に広がる海と、穏やかな波が打ち寄せる真珠のような入江。松崎町岩地地区はこの入江を囲むように、約40軒の民宿が並ぶ。昔は鰹の一本釣りで栄えた漁村だったが、今はこの地区に現役の漁師は20人。民宿を営むかたわら漁を続ける家も多く、こじんまりとした浜と斜面を這うように伸びた細い路地が、昔の漁村の面影を残している。

この日、海岸では名古屋から訪れた修学旅行の中学生が、岩地地区の観光協会や民宿の主人らに迎えられて、入村式を行っていた。岩地地区がこうして各地の修学旅行生を受け入れるようになったのは、今年で3年目。スタートした平成12年度には愛知県、静岡県などの中学校3校の受け入れから始まり、今年14年度は9校を受け入れることになった。漁



上 / 台風と出会うのも貴重な体験と語る岩地観光協会会長・斉藤文彦さん  
下 / 漁協岩地支所長の斉藤和子さん

村体験をメニューに取り入れたこの修学旅行誘致事業は、「冒険修学旅行」と名付けられ、田舎の海の自然を都会の子供たちに体験してもらおうという趣旨で始まった。

この日やってきたのは、愛知県名古屋市立桜田中学校の生徒196名。入村式を終えた生徒たちは数名に分かれて、まずは落ち着き先の各民宿へ。2泊3日の滞在中、岩地地区が準備した体験メニューは地引き網、干物づくり、釣り、シュノーケリング、カナデイアンカヌーなどと、多彩だ。

「波の穏やかな入江の特性を活かして、この浜で体験できることは実に多いんです」と岩地観光協会会長で民宿海遊荘のこ主人でもある斉藤文彦さんはいう。

## 漁協、民宿、観光協会が一体となって

「冒険修学旅行」は岩地の観光推進策を模索する中で、海の資源の掘り起こしという新



美しい穏やかな入江の岩地海岸ではカヌーやシュノーケリングが人気で、桜田中の生徒たちも実習。

- ▶ 刺身、煮魚などの豪華な夕食に大喜ぶる女子生徒たち  
夕食のあとは浜辺で花火大会を楽しむ(右下)
- ▼ 干物づくりを指導する房州屋ご主人と、飛び魚を捌いていく生徒



たな発想から生まれた。ヨーロッパの田舎を楽しむ農家民宿がグリーンツーリズムならば、これはまさしく海のグリーンツーリズムだった。地引き網、櫓漕ぎの漁船を使った櫓漕ぎ体験、クルージング体験、カナディアンカヌー体験、さらには干物づくりや漁師さん直伝の魚釣りなど。海辺の暮らしを都会の子供たちに体験してもらうさまざまなメニューが、観光協会の斉藤さんや、地元の漁師さん、民宿の人たちから提案された。

「成果を上げてきた要因のひとつは、地域が一丸となつての協力体制でしょう」と話すのは、松崎町役場商工観光課の山本公係長だ。

取り組みの中心となり、事業の企画立案を受け持つのは岩地観光協会で、学校や旅行代理店との予約や支払い業務を行なうのは松崎漁協岩地支所。漁協はこの他にも万が一の事故などに備えて、傷害保険や賠償保険の取り扱い業務も行なっている。そして実際の生徒の受け入れは各民宿が受け持ち、民宿への食材の提供はこれも漁協が担当している。さらには行政もライフジャケットやシュノーケルなどの費用に補助金を出し、パンフレットの作成やマスコミへの対応に積極的に取り組んできた。

こうした見事な連携プレイが功を奏し、県もこの松崎町岩地地区の体験型修学旅行を、今後のグリーンツーリズムのモデル地区として選んでいる。

「観光協会も民宿もそれぞれが、地域の問題として取り組んだのが良かったんでしょう

ね。民宿の割り当てや、手伝いにパートさんを頼んだ場合の支払いなどもこちらで受け持っています」と漁協岩地支所の斉藤和子所長。地域の振興というキーワードに向かって、岩地の誰もが本気で動き始めた、そんな感触が会う人一人ひとりから伝わってくる。

**海の恐さも、ちゃんと見せたい**

桜田中学校の生徒たちが逗留した夜、テレビの天気予報は大型台風の本土接近を報じていた。伊豆半島は明朝暴風雨圏内に入るといふ予報だった。その夜、民宿海遊荘では先生たちが遅くまで、天気予報を報じるテレビを前に明日の予定を協議していた。

早朝に予定されていた地引き網は早速取り止めとなった。その後には予定されていたカヌーやシュノーケリングも恐らく中止となるだろう。それらの代替案として、同行している旅行会社から出されたのが、下田の水族館見学と買い物というものだった。生徒の安全



漁船に乗るぞと裸になった男子たち





を考えれば当然のような案ではあった。そこへ夕食の片付けを終えた主人の斉藤さんが現われた。斉藤さんの意見は大きく違っていた。

「せっかくだが、台風のためにやってきたんだ。台風に向けて漁師たちがどんなことをするのか、真っ暗な荒れた海がどんなに恐いものか、子供たちにありのままの海を見せることが、俺は大事だと思うよ」

これこそが「体験」だと斉藤さんは言う。数時間前にはゆっくりと夕陽が沈んでいった薄曇りのような海は、いま不気味な波音をたてて闇の中で荒れている。

こんなに身近に台風の海と向き合えるのは、確かに貴重な体験かもしれない。

斉藤さんはいっ。

「中学生ってというのは自分本位な年頃だけど、海の恐さや自然の厳しさを身をもって知ると、子供本来のいい顔を見せるよね。この小僧、なんて思う時もあるけど、やっぱりみんな可愛いさ」

明日は斉藤さんの意見に従って、状況を見

ながら岩地で出来ることをやってみようということになった。

そして翌日、台風は速度を弱めたのか、海は雨の中、不思議な静けさに包まれていた。

生徒たちは朝食後、それぞれの民宿で干物づくりに挑戦した。民宿房州屋では男子生徒たちが慣れない手つきで包丁を手にし、穫れたての飛び魚を捌いていた。内臓を恐る恐る摘み出し、大騒ぎしながら開いていく。開いた魚は各民宿で天日干しして、干物にして後日、学校へ送られる。

### インターナショナルスクールもやってきた

去年の10月にはこの体験修学旅行に横浜のインターナショナルスクールの生徒47名もやってきた。外国の子供だからと特別な食事などは出さずに、いつもの民宿スタイルを楽しんでもらった。自由時間には奔放に個性を際立たせる生徒たちが、教師や大人に対して、実にきちんとした対応をする。

「いろいろな学校を迎えていると、子供たちから教えられることも沢山あるんですよ」と斉藤さん。こんな所にカニがいると喜ぶ生徒たちを見ると、海の自然を壊さず残すことの大切さを、改めて思うという。

さて、干物づくりが終わった生徒たちは、漁協や斉藤さんら地元の人たち、先生らの判断のもと、雨の海辺に飛び出していた。ウエットスーツに身をかためた先生がカヌーに乗って沖の側から、そして防波堤からは民宿の男衆が見守る中、子供たちは釣りに、泳ぎに、ビーチバレーにと、楽しそっだ。気温も低くはない。波も嘘のように穏やかだ。

「一目で入江全体が見渡せるし、こんな日でも安心して泳げるのが、この浜の良さですね」と子供たちを見守る民宿の人たち。



▲松崎町は天然温泉も豊富。海から上がると湯泉船でひと風呂。



万が一でも事故があつてはいけなないと、それでも見守りは波止場から、磯から、船上から無線を持つての対応だ。

「ありのままの海を体験させればいい」といった斉藤さんの言葉の裏には、幾重にも安全を確認するこんな姿勢が、しっかりと貫かれていた。台風の海を体験するのも、海のグリーンツーリズムの貴重な一面なのかもしれない。雨の浜辺を走る子供たちの顔は、吹っ切れたように明るい。

文/金山淑子 カメラ/満田美樹

問い合わせ / 松崎町商工観光課 ☎0558(42)3964  
岩地観光協会 ☎0558(45)0116

▶冒険修学旅行の人気メニュー。上から地引き網、シュノーケリング教室、樽漕ぎ体験(松崎町商工観光課提供)

# 体験学習 全国受け入れ地域 施設&主な体験プログラム

した自然体験教室(川遊び、山菜採り、溪流釣り)、藁細工、そば打ち、木工細工等 ☎0241-82-5280

## 片品村 J A 高原野菜収穫体験

群馬県利根郡片品村。約40名のインストラクターが田植え、野菜収穫体験、武尊山、尾瀬等への散策、各種工芸体験、料理教室等を指導。☎0278-58-2523

## 南房総で花摘み取り体験

千葉県安房郡和田町。南房総花卉栽培の発祥地で、クジラの来る海や牛を放牧する丘がある。東京に近い利点を生かして1泊2日の花摘み体験学習が子供たちに人気。☎0470-47-5413 役場産業課

## 小川村 体験ホームステイ

長野県上水内郡小川村経済課。農家のホームステイ 2泊3日は関東の中学生が毎年利用。他に炭焼き体験、草刈り、わら細工等。村営宿舎、コテージもあり。☎0262-69-2332

## 木曽の自然伝統体験

長野県木曽福島町産業観光課。植林・下草刈り等の林業体験、炭焼き、自然観察(サンショウ魚、山野草採集他)、わら細工、郷土料理体験(民宿、旅館) ☎0264-22-2001

## 守門村 民家・越後生活体験

新潟県北魚沼郡守門村観光協会。国重文の目黒邸、佐藤家を見学して、登山、釣り、炭焼き、スキー体験。木工、わら細工、そば打ち教室も。☎02579-7-2081

## 佐渡で自然・農林水産体験

新潟県佐渡郡真野町「ふれあいハウス潮津の里」 釣り、キャンプ、マリンスポーツ、石細工・竹細工体験、民話の語りべ体験等。☎0259-55-3311

小木町「宿根木千石船の里」管理組合。たらい船乗船を中心に、手打ちそば、団子作り、竹細工体験。☎0259-86-2077

## 輪島ふるさと体験実習館

石川県輪島市曾々木地区で、地引き網、岩倉山散策、さつまいも掘りを体験。室内では藁細工、味噌・豆腐作り、餅つき教室。宿泊は民宿 ☎0768-32-0603

## むつみ農業体験

山口県阿武郡むつみ村経済課。良質の米、野菜果実、畜産を営む高原地帯で田植え、大根・メロン・トマト収穫、木工、林業体験学習。神楽舞の観賞、乳牛飼育学習も。☎08388-6-0311

## 日南町 山里体験学習

鳥取県日野郡日南町「ふるさと日南巴ファームイン」 アルペンスキー、体験農園、木工教室 ☎0859-83-1188 「ゆきんこ村四季彩」そば作り体験、星空観察、スキー体験 ☎0859-87-0431

## かなぎウエスタンライディングパーク

鳥根県那賀郡金城町。大自然の中で乗馬体験教室を通年実施し県内小中学生に人気。☎0855-42-2222

## 津和野温泉なごみの里

鳥根県鹿足郡津和野町・道の駅主催。春夏秋冬のハイキング&山菜・釣り・干し柿作り、竹細工、津和野土人形色付け、神楽面色付け ☎0856-72-4122(工房たけとんぼ)

## 民宿美合 薬草体験学習

香川県仲多郡琴南町。徳島と県境の町で、山で取れる旬の薬草を使って薬草風呂、薬膳料理、加工等を体験学習。☎0877-84-2020

## 久万農業公園・ふるさと旅行村

愛媛県上浮穴郡久万町。公園内の農場

で野菜栽培・収穫体験、ネイチャーゲーム、竹細工、木工教室、夜は天体観察館で星観察 ☎0892-41-0040

## 壱岐観光&ビーチ体験

長崎県壱岐郡石田町観光協会。ペーロン船競漕、地引き網、田植え・稲刈り、鬼凧作りまたは古代風土器づくり。☎09204-7-3700

郷ノ浦町「壱岐学友会」ではシーカヤック、海釣り体験、農業体験を実施 ☎09204-6-0789(壱岐出合いの村)

## 西海町 ツーリズム協会・のら体験工房

長崎県西彼午郡西海町。田植え、いも掘り、みかん収穫他、体験工房ファシティングが対応 ☎0959-32-4933

## 奄美旅行センター

鹿児島県大島郡与論町。ダイビング、グラスボート、釣り等の海のレジャー体験、さとうきび刈りと搾り・黒砂糖作り、ハーレー乗船体験 ☎0997-97-3261

## 沖縄座間味島体験

沖縄県島尻郡座間味島「21ざまみ」。沖釣り、各種マリンスポーツ、パパイア植付け&収穫、郷土菓子作り ☎098-896-4450

参考資料：(財)都市農山漁村交流活性化機構発行「農山漁業体験による総合学習ガイド」「田舎で体験学習」他



## ビデオコンクールで 「観光部門賞」を受賞 地域活性化ビデオ

「川を活かす  
里を活かす」(29分)

鳥根県邑智郡を流れる江の川水系の町や村における自然の恵みを活かした取り組みを紹介した、平成13年度ビデオ「川を活かす里を活かす」が、第40回日本産業映画・ビデオコンクール「観光部門賞」を受賞しました。全国のCATVでも放映中です。

# INFORMATION

## 全国過疎問題 シンポジウム開催 2002 in やまがた

11月11日～13日  
山形県鶴岡市・酒田市  
メインテーマ



### 「地域づくりへの新たな挑戦」 過疎地域の自立と「公益」的役割

11月11日(月) 視察・夜学(立川町・朝日村・  
温海町・八幡町・松山町・平田町)  
12日(水) 全体会(鶴岡市文化会館)  
基調講演・小松隆二(東北公益文科大学学長)  
13日(水)  
第1分科会(東京第一ホテル鶴岡) 自立的  
社会の構築～起業・交流  
第2分科会(東京第一ホテル鶴岡) 過疎地  
域の新しい役割～環境教育・文化創造  
第3分科会(酒田市・東北公益文科大学)  
循環型社会の構築～環境保全・協働・コミ  
ュニティ

### 編集後記

全国公立小2、4、6年、中2年生の「体験活動等に関するアンケート」(文部省・平成10年)によれば、歩いて高い山に登ったことのない子供は55%、木登りをしたことのない子供は47%。太陽が昇るところも沈むところも見なかった子供が25%、同様に星空を眺めたことのない子供が23%もいる。およそ4人に1人が朝日も夕日も知らない現代っ子たち。天体への無関心さは田舎の子供も同じだろう。これは素晴らしい自然の世界へ誘わない大人たちの重大責任である。

今回農山村で農作業や自然観察する子供たちにふれ、その輝いた目や積極的な行動、豊かな言葉などに驚かされ、体験学習の必要性を実感した。迎える農家や地域の準備や工夫・努力があつてこそ成功していることも理解できた。

過疎市町村においても体験学習を受け入れてきたが、今後は新たに名乗りを上げる地区も出てくるだろう。ある少女が「お年寄りは大好きだけど、ご飯や掃除をしてくれるのは可哀そう」と言っていたが、受け入れ地区は従来の観光民宿的な発想ではなく、質の高いインストラクターや若者が地域住民と一丸となつて、取り組みを強めていくことが求められると思う。(A)

## DePOLA No.23

[ でばら ] 2002年秋冬号

発行日 / 平成14年9月5日  
発行所 / 財団法人過疎地域問題調査会  
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24  
オカモトヤビル8階  
☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602  
http://www.kaso-net.or.jp/  
編集協力・印刷 / 株式会社ぎょうせい  
編集工房アド・エー



羊とふれ毛刈りや羊毛の糸紡ぎ体験ができるYORKSHIRE FARM(新得町)



民家に泊って自然散策(只見町)

とち自然体験学校  
北海道中川郡豊頃町、池田町。  
カヌー教室、パークゴルフ、マウンテンボード、パードコール制作、羊毛フェルト体験、手作りバター体験。2コテージと民宿を利用。毎年4、5校を受入れている。☎01557-9-5155

教育ファームIN 大雪山地域  
北海道上川郡新得町。大雪山の麓、美瑛町、富良野町、新得町、鹿追町4町で受入れており、農家に宿泊して農家のプログラムで体験する。羊の毛刈り、馬とふれて乗馬、酪農体験。羊毛の糸紡ぎ、押し花、陶芸体験学習もある。☎01566-4-4948

川湯温泉観光協会  
北海道川上郡弟子屈町川湯温泉。森と湖と温泉の町で、乗馬、カヌー川下りを体験学習。ネイチャークラフト、乳搾り・バター作り実習も可能。民宿&ペンションに宿泊。☎01548-3-2670

つがる里山体験塾  
青森県弘前市、岩木町、鱒ヶ沢町。岩木山山麓の自然や農家で酪農、農作業を体験したり、里山自然散策、クラフト、里山食のアトリエ塾、津軽歴史探訪他。☎0172-83-2324(ル・カルフル)

うわのリンゴ園  
岩手県岩手郡滝沢村のリンゴ園で花摘み、実摘み、ジャム作り等を体験。野山散策・山菜取りと料理教室、そば打ち体験他もある。宿泊は国立青年の家を中心に。☎019-688-3535

小野田町 農業・自然体験教室  
宮城県加美郡小野田町。鳴瀬川沿いに広がる米と畜産、林業の盛んな町。田植

え・稲刈り、自然体験(川遊び、山菜採り、きのこ刈り)、収穫体験、木工教室  
☎0229-67-5123 役場農政課

関川しな織体験教室  
山形県西田川郡温海町しな織協同組合。しなの木の切り出し・皮はぎ体験、しな織センターで織りやブローチ作りを体験。宿泊は民宿で。☎0235-47-2502

月山朝日観光協会  
山形県西村山郡西川町。朝日連峰、月山、寒河江川に抱かれた大井沢で、農家のプログラムで農業体験、炭焼き、わら細工、そば打ち、和紙漉き等を体験学習。☎0237-74-2111 役場商工観光課

最上川船遊び体験  
山形県最上郡船形町。ブナ林を散策、最上川での船遊び教室、和紙作り他  
☎0233-32-2111 役場観光課

あぶくま自然大学  
福島県白川郡鮫川村。あぶくま南部高原にある農村地帯で「ほっとはうす・さめかわ」を拠点にキャンプ、野外ゲーム、星空観察、パラグライダー他を体験。☎0247-48-2045

館岩村 農業・自然体験  
福島県南会津郡館岩村農政課。田植え、野菜作り・収穫等の農業体験、木の実・蔓を採集してリース作り、昆虫・ホタル観察、川遊び教室他。毎年15校を受入れており体験施設や民宿も完備。☎0241-78-3340

只見町 自然体験  
福島県南会津郡只見町産業振興課。広大なブナ原生林、只見川等の自然を生か



フウイートで  
ウキウキのゆめ、

じわじわ、いっぱい  
あります。

本誌は財団法人日本宝くじ協会の  
助成を受けて作成されたものです。

宝くじの収益金は、  
身近な街づくりに役立っています。



財団法人 **日本宝くじ協会**

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。